令和２年度

「地域を編む孤立０（ゼロ）プロジェクト」

記 録 集

公益社団法人茨城県青少年育成協会

～ ～ ～　目　次　～ ～ ～

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

令和２年度「地域を編む孤立０(ゼロ)プロジェクト」モデル事業

〇ＮＰＯ法人茨城居場所研究会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

〇かさま不登校ネットワーク all-unique　・・・・・・・・・・・・・・　3

〇ここに種をまく（新型コロナウイルス感染拡大のため中止）・・・　4

〇＜資料＞募集要項　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

令和２年度「地域を編む孤立０(ゼロ)プロジェクト」緊急座談会

〇開催概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

〇第一部　講演(13:00～14:00)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8

講師　茨城大学教育学部 教授　　生越　達　先生

＜講師略歴＞
1960 年生まれ。東京大学に進学、東京大学大学院を卒業。
1992 年から茨城大学教育学部において教鞭を執る。2014 年には教育学部長を歴任。現在も、同大学教育学部教授として、不登校児童・生徒に関する現象学的研究をはじめ、発達心理学や臨床心理学、青少年心理学などを専門に研究を行っている。
茨城県スクールカウンセラー、県青少年育成協会「青少年心理アドバイザー」。

〇第二部　座談会(14:10～15:45)・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17

参考資料

〇令和２年度「あいさつ・声かけ運動」「大人のマナーアップ運動
―大人が変われば、子どもも変わるー」強調月間（11 月）
市町村・青少年育成市町村民会議　取り組み調査結果　・・・・・　43

はじめに

明日の茨城を担う青少年が、豊かな心を育み、たくましく成長し、豊かな人間関係の中で体験を通じて自立し、活躍できる社会の実現は、すべての県民の願いです。そのためには、我々は地域全体で子どもを見守り、困難を抱える子ども自らが声をあげることのできる環境づくりに、粘り強く取り組み続けていかなければなりません。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、これまでの子ども・若者育成支援活動は実施そのものが困難になり、通常とは異なった様々な対応に迫られました。

当協会においては、５月の「青少年育成市町村民会議会長・事務局長・青少年行政担当者等研修会」、８月の「地域を編む孤立０（ゼロ）プロジェクト」合同研修会、さらには２月の青少年健全育成茨城県推進大会が中止となり、青少年育成市町村民会議をはじめとする当協会正会員や関係団体が一堂に会し、青少年育成活動の充実を図る機会が失われました。

そこで、今年度実施した「地域を編む孤立０（ゼロ）プロジェクト」事業を記録集としてまとめ、皆様への情報提供として配布し御活用いただくという形に代えさせていただきました。

本書は、子ども・若者が抱える多様な課題に取り組む団体に助成等による支援を行う「地域を編む孤立０（ゼロ）プロジェクト」モデル事業を紹介しています。残念ながら１つの団体は開催直前に中止となってしまいましたが、２つの団体が取り組んだ講演会は、会場とオンラインの同時開催、講師のリモート出演など、これからの活動の新しい手法の一つになることを実感しました。

また、これからの新しい活動スタイルを模索するため、関係者による緊急座談会を開催しました。本書に、茨城大学の生越先生のお話や、青少年育成団体やモデル事業団体の生の声を掲載しています。皆様の活動の一助となれば幸いです。

コロナ禍にあっても、我々は青少年育成支援の歩みを止めず、一歩でも前に進まなければなりません。今後は「新しい生活様式」とともに「新しい活動様式」を構築し、この困難を逆風としてではなく、推進力に変え、次の飛躍につなげていきたいと思っています。

令和３年３月

公益社団法人茨城県青少年育成協会 会長　大窪 修二

事業名	ひきこもりがちな青少年等に対する偏見なき知識の普及啓発事業
団体名	ＮＰＯ法人茨城居場所研究会（日立市）　E-Mail　ib.ibasho@gmail.com
連携・協働団体	大みか交流センター　茨城精神保健福祉士協会　日立市教育委員会
事業のねらい	一般市民にも開かれた場で、ひきこもりがちな若者の現状と問題を知り、語り合う場を設けることを目的とする。テーマは「生きる・つなぐ・暮らす」とする。
活動の内容	ひきこもりがちな若者の進路選択に関するヒントを得るための３回連続講座。 9/20(日) 第一回「生きる」　日本における若者の貧困問題の現状について知る。 講師：一般社団法人つくろい東京ファンド　佐々木大志郎 氏、古家雄太郎 氏 佐々木氏はネットカフェでの生活を経験後、現在は住まいを失った方や生活困窮者への支援を行っており、その現状を聞いた。 10/7(水) 第二回「つなぐ」　高卒は必要なのか。若者のキャリアを考える。 講師：一般社団法人 new-look 代表理事　山口真史 氏 一般社団法人ライフデザイン・ラボ 代表理事　白水崇真子 氏 高校中退者等の高卒認定試験に向けた支援、若者向けの就労支援等、キャリア支援の現状についての他、茨城県に関する情報もお話しいただいた。 11/5(水) 第三回「暮らす」　自分らしく暮らしていくには 講師：株式会社創造集団４４０Ｈｚ　石本恵美 氏、長井岳 氏 石本氏の不登校経験から現在に至るまでのライフストーリー、オルタナティブスクールの現状などを講演。長井氏は、参加型のワークショップを行った。
効果及び自己評価	全ての回で、ZOOM 会議室と並行して、ネット環境が整わない方のために大みか交流センターに大型スクリーンを準備し、オンタイム上映会を実施した。 オンラインで開催したことで、遠方の講師にも依頼することができた。 貧困問題や若者支援の最前線の情報、不登校経験のある方のライフストーリーを聞くことで、参加者個人、団体それぞれが今後の方向性を考える機会にもなった。 オンライン講座は増えつつあるが、まだ抵抗のある市民も多い。 また、必要な方に情報が届いていない部分もあり、今回の広報の方法では課題が残ったといえる。
活動の様子	

事業名	「家庭を安全基地に ～子どもの声を拾える親であるために～」 佐伯和也 氏　講演会
団体名	かさま不登校ネットワーク all-unique（笠間市） E-Mail　kasama.all.unique@gmail.com
連携・協働団体	事業協力：「For everyone study」　「寺子屋てらこ」 「にじいろカフェ」　「志学塾」 チラシ提供団体：「さなぎ」　「フリースクールこどもの SONORA」 「ゆめのいえ」　「おばら子どもの居場所」
事業のねらい	子どもにとって家庭を安全基地にすることで、子どもの心の孤立は防げるだろう。安全を感じる環境とはどういうものなのか、そのためにどんな視点・意識が必要なのか、親の学び・気づき・成長を促す機会となるよう、講演会を開催する。
活動の内容	参加者：６６名（会場４１名、オンライン２５名） 関係者：１７名 午前：佐伯和也 氏　講演「家庭を安全基地に」　会場＆オンライン開催 「いばらき不登校・多様な学び応援サイト」紹介 「For everyone study」紹介 県内にある親の会のチラシ配布 アンケート実施（回収率 約７０％） 午後：佐伯和也 氏　公開コーチング 事前に相談内容を提出した者の中から数名が壇上にあがり、公開で個別コーチングを受講。 講師のご厚意により、講演当日の動画公開と合わせ、今回寄せられた親御さんからの質問に自身の動画チャンネルで答えてくれている。
効果及び自己評価	笠間市内やその周辺にチラシを配布したことで認知度がアップし、茶話会への参加者が増加した。 また、今回の事業を進めていく中で、公的機関や子育て支援団体等とつながりを持つことができた。 講演会の開催により、人と人とをつなぐ役割も果たしたのではないかと思う。アンケート結果から、現在進行形で孤立している方は、外と繋がるきっかけが持てていないことが分かり、地域を超えて親同士が話せる場、繋がれる場づくりの必要性を強く感じ、毎月の茶話会を継続していこうと改めて思った。今後、各市町村に親の会ができることを期待したい。
活動の様子	

事業名	フトウコウシンポジウム
団体名	ここに種をまく（ひたちなか市）　E-Mail　kokonitane@gmail.com
連携・協働団体	学校が苦手な子と親の会　さなぎ
事業のねらい	地域を編む実践者となる多くの人に不登校について知ってもらうことで、地域自体が安心できる居場所になっていくことを目指す。
活動の内容	下記の通り開催に向けて登壇者とのヒアリングを重ね、チラシ・SNS 等で広報を開始していたが、新型コロナウイルスの感染状況が再度拡大したことを受け、今年度中の実施の中止を決定した。 ＜計画＞ 実際に不登校の子を対象に活動されている方・不登校経験者・保護者の話に触れてもらうことで理解を深め、他人事ではなく身近なこととして認識してもらい、当事者や家族・学校・行政・地域がどうつながっていけるか、自分に何ができるのかを考えてもらう機会にする。 〇当事者親子の話　福井県（オンライン）・栃木県・茨城県の３組 〇不登校の子を対象に活動されている方の話 ・栃木県高根沢町フリースペース ひよこの家 教育相談員　芳村寿美子 氏 ・NPO 法人キーデザイン 代表　土橋優平 氏 〇実施予定日　令和３年２月 21 日（日）13：30～16：30
効果及び自己評価	募集開始後すぐに申し込みがあり、SNS での中止のアナウンス後もチラシを見たと思われる方から申し込みがあるなど、関心の高さがうかがえた。 登壇者とのヒアリングでは、聞き手に届く内容になる手ごたえを感じていただけに、中止せざるを得ない状況になり、残念であった。 今回、今年度中の中止を決定したが、このシンポジウムは次年度必ず何らかの方法で形にしたい。
活動の様子	

令和２年度「地域を編む孤立０(ゼロ)プロジェクト」モデル事業　募集要項

１　目　的

子ども･若者が抱える多様かつ複雑化した問題において､「地域を編む孤立０(ゼロ)プロジェクト」事業の趣旨に沿った活動に取り組む団体、活動を公募し、補助金の交付、アドバイザー派遣等による支援を行います。

「地域を編む孤立０(ゼロ)プロジェクト」事業　趣旨

不登校、ひきこもり、貧困、虐待など、現代の子ども・若者が抱える問題は深刻化かつ複雑化しており､その課題に対応するためには､複合的かつ多様な支援による共助機能の充実が必要である。

子ども･若者育成団体･支援者等が持つそれぞれの糸をいくつもの方向から絡めあい、支援という網を、さらに細かく、強い網にして、網の目からすり抜けて孤立してしまうことがないよう、複合的支援活動を推進することを目的として､地域の孤立０(ゼロ)の取り組みの全県的な波及効果と支援活動の発展を図る。

２　対象となる活動

（１）茨城県内で行う活動を対象とします。

（２）従来行っている活動であっても、新たな視点を取り入れたり、参加者を増やしたり、今までの活動を拡充する内容であれば対象とします。

（３）活動において参加者の募集を行う場合には、参加者を特定する特別な理由がある場合を除き、不特定多数の方々にも広く呼びかけをお願いします。

＜活動例＞

①　市町村単位・学校区単位で開催する、不登校・ひきこもりの理解を深めるための研修会・勉強会

②　子どもを対象とした「子ども料理教室」「学習支援プログラム」

③　子ども・若者が安心して過ごせる居場所づくり（勉強会、研修会等含む）

④　新たな子どもの貧困支援団体の設立活動（広報、研修、活動費 等）

⑤　複数の団体による虐待防止キャンペーン活動（啓発品の作成・配布）

なお､例示に限らず､地域の特色や団体の特性を生かした活動を募集します。

３　対象となる団体

（１）青少年育成市町村民会議、ＰＴＡ、青少年相談員、生涯学習・社会教育に関わる団体、青少年育成団体、またそれに類する団体・グループ等とします。

（２）営利活動を目的とする団体、政治団体、宗教団体は対象から除きます。

４　実施時期

補助金交付決定の日から令和３年２月 28 日(日)までに実施する事業とします。

５　補助金

（１）１団体・グループに対する補助金は10万円を限度とします。

（２）補助金は活動を行うのに必要な経費としますが、次の経費は対象から除きます。

① 団体・グループの運営に係る経費(人件費、光熱水費、電話代等)

② ５万円以上の備品購入費

③ 団体・グループ関係者への謝金（交通費は可。講師は外部講師とする）

④ １回につき５万円を超える講師謝金（複数回の合計は可）

⑤ 団体・グループ関係者の飲食費（講師の弁当代等は可）

⑥ 審査会において、適当と認められない経費

６　モデル事業の指定

応募のあった事業内容を審査会において審査のうえ、予算の範囲内において補助金の交付先を選定し、モデル事業として指定します(以下「モデル団体」という)。また、補助金額の決定も行います。

なお、審査会において、応募団体の方に審査会への出席と事業説明を求める場合があります。

７　アドバイザーの設置

事業を効果的かつ円滑に進めるため、各モデル団体に(公社)茨城県青少年育成協会の役員１名～２名程度がアドバイザーとして担当します。

８　事業実施後の報告等

事業実施後、別に定める様式により活動内容を報告していただきます。

９　応募方法・締め切り

（１）応募に当たっては、「事業計画書（別紙１）」及び「収支予算書（別紙２）」を郵送又はＦＡＸ、Ｅメールにて提出願います。

なお、別紙１、別紙２は、必要に応じて変更してご使用ください。データは、当協会ホームページからダウンロードできます。（http://www.ibaraki-ikusei.jp）

（２）一次締め切りは令和２年６月30日（火）までとします。

応募状況等により、二次募集を行う場合があります。

＜ 応募先・問い合わせ先 ＞

公益社団法人茨城県青少年育成協会

〒310－0034　水戸市緑町１－１-18　茨城県立青少年会館　３階

TEL　029‐227‐2747　　FAX　029‐228‐6200

E-Mail　sha@ibaraki-ikusei.jp

「地域を編む孤立０(ゼロ)プロジェクト」緊急座談会

開催概要

１．趣旨　　生まれ育った環境、社会情勢や価値観の変化などにより、貧困や虐待、ひきこもりなど、困難を抱える子ども・若者が増えている今、私たち大人が手を取り合い、地域全体で子ども・若者を見守り、育む必要性が高まっている。

　しかし、新型コロナウイルスの出現によって、これまでの子ども・若者育成活動は実施そのものが困難な状況にあり、これから「新たな生活様式」とともに「新たな活動様式」を構築しなければならない。

　そこで、子ども・若者育成団体等が、地域で子どもたちにどうやって関わり、どう支えていくのか、これからの活動スタイルの模索にチャレンジすることを目的に座談会を開催する。

　なお、本事業は今年度新型コロナウイルスの感染拡大防止のため中止となった「青少年育成市町村民会議会長・事務局長・青少年行政担当者等研修会」及び「地域を編む孤立０(ゼロ)プロジェクト」合同研修会のリスタート事業として実施する。

２．日時　　令和２年 11 月 28 日(土) 13:00～15:45

３．場所　　茨城県立青少年会館　３階　中研修室２

４．主催　　公益社団法人茨城県青少年育成協会

５．共催　　茨城県ＰＴＡ連絡協議会
　　茨城県青少年相談員連絡協議会
　　茨城県生涯学習・社会教育研究会

６．協力　　ＮＰＯ法人茨城居場所研究会
　　かさま不登校ネットワーク all-unique
　　ここに種をまく

７．協賛　　ライオンズクラブ国際協会３３３－Ｅ地区
　　日本たばこ産業株式会社東関東支社

【第一部　講演（資料掲載）】

ひきこもり・不登校の子どもと地域のかかわり

茨城大学教育学部 教授　生越　達

はじめに

長く不登校のこどもたちとかかわってきた。フリースクールにおいて、さらにはスクールカウンセラーとして、４０年弱ほど不登校という事象に関係してきたことになる。私が関わってきたのは、ほとんどが高等学校在学段階までの子どもたちだが、現在はひきこもりの高齢化が問題視され、８０５０問題などと言われるようになった。ひきこもりの長期化が問題となってきているのである。また、私自身の関わりの時間の流れの中でも、不登校の子どもたちの様子も少しずつ変わってきたように思う。以前は身体症状が強く出たり、激しい攻撃性が母親に対して向けられたり、すさまじいひきこもり方であったりと、強い葛藤状況に陥っている子どもたちが多かったように思う。

いろいろな子どもたちと出会ってきた。心理的な理由から歩けなくなってしまった子どもに出会ったこともある。また激しい攻撃性にも立ち会ってきた。そうした子どもの部屋にはこんなところに穴があくのかと思うような穴が壁に空いていたりした。すさまじい家庭内暴力にも出会ってきた。ひきこもるということでは、半年間、風呂にも入らず、夜中のトイレ以外、自分の部屋からまったく出ようとしない子どももいた。食事は彼の部屋のドアの前に置かれる。彼の部屋にはテレビも、また昔の話なのでパソコンや携帯電話もあるはずもなく、彼は半年間、ラジカセだけを友達として自分と向き合ったことになる。まさにひきこもるということの激しさを感じた。ただ最近では、家族と普通に話すこともでき、日常の様子を見ていると、とくに何の問題も抱えていないのではないかと思われるような子どもたちにも出会うようになってきた。外に出られない以外は、部屋に閉じこもることもなく穏やかに過ごしているのである。だがひきこもりの症状が穏やかになってきたことは、必ずしもひきこもりの問題がいい方向へ進み始めているとは言えないように思う。ひきこもりの長期化とも関わっているのかもしれない。

もちろん、私自身だって、実質的にはずいぶん長く社会からひきこもってきた。私が勤め始めたのは３３歳の時である。また、いまだって十分に社会に出

ているかと言われれば、自信をもって「はい」とは言えない状況にいる。
　だからといって言うわけではないが、不登校の子どもたちと関わっていると安心できるということもあった。だからこそ関わってこられたのかもしれない。私の出会った子どもたちの多くは繊細で、真面目な子どもたちだった。繊細すぎるから、そして真面目すぎるから、適応できなくなる。一時期不登校の分類で優等生の息切れ型ということが言われ、彼らが自分らしく生きられずに過剰適応に陥っているというようなことが言われたが、私はときに、まさに周囲に敏感であることは彼らの本質でもあるのであって、それは治すようなことではなく、ただ現代社会とミスマッチを起こしているだけなのではないかと思うこともあった。
　そこで、本論では、まず現代社会について考えたうえで、彼らの世界について考えてみたい。最終的には、このような状況のなかで地域はどのようにひきこもり・不登校と向き合うべきなのかについて私なりの考えを述べられたらと思う。

１．私たちはどこへ向かおうとしているのだろうか～現代社会を考える

　子どもたちにとって現代社会は生きやすい社会なのだろうか。確かに豊かな社会が来て、貧困家庭が大きな問題になっているにしても、全体としては物質的に恵まれた生活を送っているといえるだろう。だが、子どもの幸せという視点からこの社会を見てみると、決して子どもたちは「精神的に」豊かな生活を送っているとは言えないことに気づく。低い自尊感情しか持てずに、簡単に「死んでしまってもかまわない」とか「死にたい」という言葉を投げかける子どもが存在している。また他者に対する想像力を失い、相手がどんなに傷つくのか気づくこともなくひどい言葉を投げかけてしまう子どももいる。
　私はこのような子どもたちの状況は社会が生み出したものだと感じている。そしてこうした傾向はますます強まっているように思う。このような状況は、国の教育政策に任せておけば良くなるのだろうか。私にはそうは思えないのである。だからこそ、地域のもつ意味があるように思う。これからの社会の在り方を国に任せるのではなく地域がデザインしていくこと、そのために地域がこれからの社会に向けての願いをもつことが大切なのではないかと思うのである。社会の問題を短い時間で語ることはできないが、以下においては、消費社会、教育の人材養成化という二つの視点から簡単に検討してみたい。

（１）消費社会と自尊感情（自己肯定感）の低下

　消費社会が訪れた。生産する能力でなく消費する能力で優劣が決せられる。お金をもっていることが、能力があると考えられやすい社会が到来したと考えることができるだろう。子どもたちも、たとえ何も生産していないとしても、消費者になれるかぎり能力を有しているとみなされる。本論では詳しく述べる余裕はないが、この消費社会は、格差社会を生み出し、ひとり親家庭を中心に貧困の問題を生じさせた。また消費社会は家族を解体し、個人を個人として析

出させてしまった。当然地域の固有性は見失われ、地域はグローバリズムのなかに呑み込まれていく。地域が独自な固有性をもって存在しにくい時代なのであり、この点は以下に述べるような地域の役割を果たすことが難しい状況にあることを意味する。ただ今日はこの点について詳しく検討することはできない。

一つ指摘しておきたいことは、消費者としての子どもは、消費活動があるかぎり一人の能力者として認められることになり、一見幸せになったのではないかと思われるが、現実には、多くの子どもが自尊感情を低下させてしまうことになるということである。なぜなら、消費社会では「売れるかどうか」が大切だからである。消費する側に立っている限り、提供されるサービスが消費に値するかどうかを考えていればいいが、ふと自分が消費の対象であることに気づいてしまうと、子どもたちの多くは自らが他者の消費に値する存在であると自信をもって答えることはできないからである。そして他者の消費の対象になろうと、見られる自分を肥大化させるようになるからである。

消費社会は有用性が支配する社会である。自分の存在が有用だと信じられる間はいいが、冷静に見つめるかぎり自分はそんなに有用な存在ではありえない。したがって自分は売れない価値のない存在なのである。したがって「自分は自分でいいんだ」という無条件の自信を持てず、見られる自分を一生懸命に飾ろうとあくせくすることにもなる。大人も子どもも、消費社会においては、つねに自分の商品価値を問われる。可視化できる成果を問われるのである。そこで求められる個性はつねにいわゆる社会で求められる個性、売りになる個性に過ぎない。

大げさかもしれないが、私は「ひきこもり」の問題を考えるためには、こうした消費社会を問うこと、そして新たな社会のデザインを示すことが必要なのだと思う。

（２）人材養成としての教育政策

教育政策の側から見てみよう。平成 18 年に教育基本法が改正された。私にはこの改正は、教育の進むべき方向を考えるに際して重要な転換点だったと思う。この点についても本論で詳しく検討する余裕はないが、おおざっぱにいえば、一人ひとりの幸せのための教育から経済を豊かにするための、つまりは国のために生きてくれる人材養成への転回である、ということが言えるように思う。もちろん、旧教育基本法は、戦争への反省から、国のための教育から個人のための教育へと転回しようとしたが、まもなく、再転回が生じ始める。こうした傾向を決定づけたのが改正された教育基本法なのである。

もちろん、経済が大切なのはわかる。だが、もっと大切なのは、一人ひとりの人間であり、子どもたちだったはずである。だが、そうした眼差しは消えて

いき、経済を豊かにすることが大切なのであり、経済を豊かにできる人材を養成することが大切なのだということになってしまっている。経済重視の社会では、貧困は実質的な生活の貧しさ以上に私たちを苦しめることになる。

そして個人はバラバラになり、共同体という「大きな物語」は失われていく。隣の人のことなんて知ったことではないのである。こうした社会に他者の「風景化」が生じることは自然な成り行きであろう。子どもたちを見ていて気づくのは、いじめられている子どもの痛みはわからないということである。したがって、いじめというゲームがはやり、傍観者も増えるのである。学校だけではなく、社会に他者の痛みがわからない傍観者があふれていく。

こうした教育政策に呑み込まれないためには、まず子どもたちの声を丁寧に聴きとることが求められるのだと思う。これからの社会をデザインするためには、まずはそこに生きる私たち人間の声を丁寧に聞き取ることが出発点なのである。地域は、その自由さを生かして、社会を生きる人間の声を聴くべきである。したがって、ひきこもる人々の声を聴くべきである。声を聴くということがこの社会に成立するだけでも、この社会は大きく変わるはずである（注１）。そして声を聴くということは、毎日生じている小さな出来事を大切にするということでもある。

２．私たちは何を大切にしなければならないのか

私は、私たちの社会にとって最も大切なことは、現代社会において薄れてきている人と人との「つながり」を取り戻すことではないかと考えている。なぜなら人間はそもそも共同性を内在化させた存在だからである。教育にかぎって考えてみても、もともと子育ては共同養育なのであって、母親だけが子育てをする動物ではなかったはずである。教育という視点からも地域の役割は大きいのである。地域が家庭とともに、そして学校とともに子育てを行う動物が人間なのである。そしてこのように人と人との「つながり」を大切にすることによって、「つながり」のなかで際立つものとして個性が成立する。

スクールカウンセラーをしていても、子どもたちは他者とつながりたいのだなと感じることがしばしばある。友達関係で悩み、合唱コンクールの練習がうまく進まないことに悩んで話に来た女の子は、大好きな水戸ホーリーホックの話を一生懸命にしてくれる。悩みを解決することも大切だが、自分の話を聴いてもらうことによって他者と世界を共有することも、悩み同様に、あるいはより以上に大切なのである。子どもたちが私にプレゼントをくれることもある。だが、そのプレゼントには自分を受け止めてねという願いが込められていたりする。スクールカウンセラーとして子どもたちと話をしていると、しばしばどんなに他者とのつながりが大切なのかということを思い知らされるのである。地域は、この社会にどんな「つながり」を紡いでいくことが可能なのだろうか、考えることが求められている。

社会学者の宮台真司は、社会全体が「学校化」してしまったと捉える。かつ

ては勉強などできなくても、学校を離れて「家」や「地域」に戻れば、別の価値観が存在しており、自分の居場所を見つけることができた。しかし今日では、社会全体が「学校化」することによって、家庭でも地域でも勉強のことをうるさく言われるようになる。宮台は、このような息の詰まる社会から逃れるために子どもたちは「街」という「第四空間」に流れ出ることによって「まったり」しようとしているのだと捉えた。だが、宮台は、さらに社会は変質し、「脱社会化する」子どもたちが増えてきたのだと言う。つまり社会そのものから逃亡してしまうということである。だからこそ「人を殺してはなぜいけないのか」といったありえない問いも成立するのだ。人を殺していけない理由など本来ない。殺せないから殺さないのである。それなのにそのことが問いになること自体、社会が機能しなくなってきていることを意味する。地域はこうした状況を放っておいていいわけはないだろう。

それでは、どうしたらいいのであろうか。社会が子どもたちをどう承認し、自尊感情を育むことができるのか、そして目に見える成果でばかり見るのではなく、子どもたちの成長のプロセスを失敗をも含めて受け止めることのできる社会をどのように形成していくのかということが問われているのだと思う。

この点ですでに述べたとおり、国の教育政策に頼ることはできない。文部科学省は、「あなたはあなたでいいのよ」というメッセージは、子どもをつけあがらせるので、自尊感情を育てることは危険であり、何か成果を出したときにその存在を承認するという自己有用感を育むべきだと捉えている。しかし、私は子どもたちの自尊感情を育てることが脱社会化へと陥る壁を高くしてくれるように思っている。脱社会化する子どもたちに病名をつけて普通の人から切り離すのではなく、そして彼らは異常なんだと位置づけることで安心するのではなく、子どもたちを共同性の内にとどめるような関わりが必要なのではないだろうか。

３．不登校・ひきこもりとは何か―聴くことの大切さ

一人の少女の例を考えてみよう。不登校であると同時にリストカットもしていた中学生である。彼女ははじめ、相談室に来て、教室で話をしていると声が届かない気がするということを訴えた。その後、彼女の訴えは、勉強する意味が分からない、人は信用できないという訴えに変わっていった。勉強をしてもただ覚えるだけで何の意味があるのかわからないという。ただ、彼女は成績がとてもいい生徒だった。また親や教師はうるさいだけでわかってくれない、そして友達は怖いという。そしてリストカットをすると落ち着くのだという。

ここには彼女の拒否する世界がはっきりと示されている。私たちは、彼女の

考え方を単に否定するのではなく、むしろ彼女の世界に学ぶことによって、この社会の課題を知ることを求められているのではないだろうか。私たちは、不登校・ひきこもりの人を、現実の社会に引き戻せばいいのではなく、彼らとかかわりながらこれからの社会を考え、そしてそうした社会をつくっていくことによって彼らが社会のなかに居場所を感じられるようにするということが大切なのだと思う。不登校・ひきこもりは、彼らにとって自らの生き方を考えていくプロセスで生じることであり、私たちはそうした彼らのそばにいて、これからの社会に求められることは何なのかを一緒に考えていくことが必要なのではないだろうか。壊れた部品を交換して治すかのように、単純に彼らの悪いところを治療して現実の社会に戻すという管理的発想から自由になり、彼らがそれぞれの思いを交流するコミュニケーションの場を作り出していくこと、つまり居場所を作り出していくことが私たちの仕事なのではないだろうか。

不登校・ひきこもりに陥る人のなかにはプライドの高い人が多いが、それは彼らが自分を守ろうとしているということであって、自尊感情を育めば、優しさが取り戻されるのではないだろうか。コミュニケーションをとおして自尊感情が育まれることにより、彼らは社会のなかに入っていくことができるだろうし、そして彼らが社会に戻っていくことにより、この社会を優しく変えてくれるはずである。

地域の課題は、宮台の言う「街」とは異なる第四空間を準備することだろう。自らの存在を承認しあえるようなコミュニケーションの場、その意味で自分というものを大切にしつつ、他者と聴きあうことのできる場である。地域に求められているのは、そうした場を社会のなかに作り出すことではないだろうか。

４．現実問題として―地域に何ができるのだろうか。

あれこれと抽象的なことを述べてきた。だが、そんなことばかりを言ってはいられないだろう。現実にひきこもり・不登校の問題は生じており、何とかしなければならないのである。このように考えた時に、地域にできることはどのようなことだろうか。以下、いくつかの可能性について検討してみたい。

（１）子ども理解の二つのスタイルを区別すること

地域がコミュニケーションの場を準備するためには、地域は二つの理解のスタイルを区別することが求められるだろう。理解の一つのスタイルは、社会から見た理解である。たとえば、ある人に知能検査をして、ADHD であるとか LD であるだとか、また愛着障害だとか、自己愛障害だとか名づけるような見方である。あるいはそうではなくても、ひきこもり・不登校に対して、それを病気としてとらえ、彼らを正常に戻そうとするような見方である。ある教員は、相談室登校をしている子どもに、「ここまで来

たのだから教室に入れ。そうでないとおまえの一生は台無しになる」と言って無理やりもとの世界に戻そうとした。その時、教師は、その子どもに対して、子どもの側ではなく社会の側にたった理解をしていると考えることができるだろう。

私はこの点に関して苦い思い出がある。私はある時期フリースクールで音楽を担当していたことがある。それぞれ楽器を選んでみんなで一つの曲を仕上げるのである。ある日の出来事である。私は、初めてフリースクールを訪れた子どもに、何気なく、「さあ、一緒にはいってやろうよ」と声をかけてしまったのである。その子は、「そんなことを言うなんて、ここは学校と同じじゃない」と私に言い放ち、そのまま帰ってしまった。なんでも人に合わせて一緒にやるものだという意識は私たちの内面に深くしみ込んでおり、私自身自分の内なる学校化の眼差しに気づかずにいたのであった。彼女のおかげで私は自らの内なる眼差しに気づくことができた。

もう一つの理解のスタイルは、ひきこもり・不登校の人の傍にいて、彼らの世界を彼らの側から理解しようとするような理解である。いま地域に求められているのは、後者であろう。学校化の眼差しにとらわれないために、当事者の視点から世界を見ることを求められている。そして地域は、当事者の世界をよく見ることをとおして、地域の在り方をデザインするのである。良きデザイナーはまず見ることを大切にしているはずである。

（２）学校的価値観に取り込まれないこと

上記のことから自然とでてくることだが、すでに述べたように、「学校化」の眼差し、さらには「消費社会化」の眼差しは深く私たちに巣くっている。つい気を許すと、そのような眼差しで子どもたちを見てしまうのである。だが、すでに述べたように地域は学校ではない。そこで学校的価値に取り込まれずに、ひきこもり・不登校の世界に対して安易にダメだと言わずに、彼らの世界をまずは丁寧に見てみることが必要だろう。そうではないと、地域の眼差しは、それが善意の眼差しであるにもかかわらず、あるいは善意の眼差しであるからこそ、学校的価値観を彼らに押しつけるお節介なおじさん・おばさん（お兄さん・お姉さん）の眼差しになってしまうだろう。

私は、地域はおじさん・おばさん（お兄さん・お姉さん）としての関係をとるべきであり、つまり「斜めの関係」が地域の眼差しではないかと思っている。正面から向き合ってしまうと、彼らを何とかしなければと焦ってしまい、成果を出すことを急いでしまうということにもなりかねない。そうではなく、少し余裕のある立場から、彼らを理解し、そして支援するといったことが大切なのではないかと思う。そうすれば、彼らの失敗も余裕をもって受けとめられるはずである。

ひきこもり・不登校の人はひどく失敗することを恐れていたりする。失敗を恐れるあまり動けなくなってしまっている人もいる。だが、失敗することが許されることで、私たちは自らの存在の価値を感じ取れるようになっていくよう

に思う。したがって私たちに失敗を受けとめる余裕が必要なのである。たしかにときにひきこもり・不登校の人に振り回されることになってしまうかもしれない。しかし振り回されることも必要なことであるように思われる。

また引きこもり・不登校の人を受けとめるために、安易に褒めればいいと考えることは間違っているように思う。過保護に守ろうとすること、彼らを正当化することが重要なのではなく、彼らの世界を聴きとろうとすることが大切なのだと思う。そうすることで、彼らは外の基準によってではなく、自らの基準に基づき自分の人生を設計できるようになっていくのではないだろうか。

（３）親を受け止めること、そしてともに「学校化」を乗り越えていくこと

すでに述べてきたことだが、保護者も「学校化」している。学校的価値観から抜け切れず、子どもに必死になって勉強を強いる親もいる。宿題が終わらないのを親が一緒になって夜中まで頑張るといったことをしばしば見聞きする。また宿題を終わらせることを家庭教育の仕事として保護者に求める教員がいて、学校もそれを当然だと考えていたりする。だが、親は教師ではないはずである。と同時に、やはり親がひきこもり・不登校に陥っている自分の子どもたちを受け止められないとするならば、ひきこもり・不登校に陥っている子どもたち自身も、なかなか自らの存在を受け入れられないだろうし、自尊感情をもつということは難しいだろう。

そこで私たちの役割として、親の話を丁寧に聴きながら、学校的な価値にそんなに拘泥(こうでい)する必要はないこと、いわゆる社会化を目指す前に、まずは彼らの存在を受け止めることが大切であることに気づいてもらうことが大切だと思う。

（４）自然なコミュニケーションの場を準備すること、キャリア教育として

斜めの関係と同時に大切なのは、みんなでコミュニケーションする場であろう。フリースクールにかかわってみて、私自身とのかかわりより、同年代とのかかわりがより重要な意味を持つことに気づいた。彼らは同年代の子どもたちとコミュニケーションをとることによって自尊感情を育むことができる。

またフリースクールは異年齢の子どもたちの集まる場だが、異年齢集団のもつ意味も忘れてはならないだろう。異年齢集団のかかわりによって年少の者にとっては斜めの関係を築くことのできる他者が存在することになるだろうし、年長の者にとっては自らの存在が他者の役に立つという経験をすることになるだろう。年少の者にとっても、年長の者にとっても、こうしたかかわりは自尊感情を育むことにとって重要な意味をもつだろう。

失敗してもいいのだという気持ちが育っているのならば、ボランティアをしてみてもいいだろうし、働いてみることもいいかもしれない。誰かの役に立つ

ことで自分の存在を受容できるようになっていく。彼らにとって社会は入っていく前が一番怖いのである。世の中が厳しいばかりではないことを経験できることは重要である。だが、そのためには、そのような場を地域が作り、探していかなければならないということになるだろう。

おわりに

今現実に何十年も自宅から出ようとしないようなひきこもりの人と関わっている方もいるだろう。もはや生活の困窮や家庭内暴力で一刻の猶予もない場合もあるだろう。そんななかで、上記のような提言は、なんと楽観的なことだろうと感じている方が多いかもしれない。もちろん、鬱や発達障害を抱えている場合などを含めて医療機関や福祉との連携が必要な場合も多いかもしれない。ともかく働くようになることが大切だという考え方も理解できる。だが、地域独自の役割としては、上記に述べたようなことを忘れてはいけないのではないかということが私の思いである。

注 1
ミヒャエル・エンデの『モモ』は現代社会を考えるのに大きな示唆を与えてくれる。拙論、2010、「『モモ』における時間性―教育の計画再考-」『茨城大学教育実践研究 』29 号、pp.237-253.

【第二部　緊急座談会】

＜参加者紹介（敬称略）＞

発言者　【緊急座談会 講師】

茨城大学教育学部 教授　生越　　達

【主催・共催団体】

（公社）茨城県青少年育成協会 会長　大窪　修二

茨城県ＰＴＡ連絡協議会 会長　畠山　佳樹

茨城県青少年相談員連絡協議会 会長　山口　恒巳

茨城県生涯学習・社会教育研究会 会長　長谷川幸介

【モデル事業団体】

ＮＰＯ法人茨城居場所研究会 理事長　朝日　華子

日立市を中心に、居場所づくり等を通して、ひきこもりがちな若者をサポートするための活動をしている。

かさま不登校ネットワーク all-unique 代表　根本比奈子

笠間市において、不登校の子をもつ保護者の会として「茶話会」を定期的に開催している。

ここに種をまく　木村　理恵

ひたちなか市において、講演会や学習会など、子どもや社会に寄り添い、未来をみんなで考えていく活動を行っている。

進　行　茨城県生涯学習・社会教育研究会 事務局長　大月　光司

書　記　茨城県ＰＴＡ連絡協議会 事務局長　大和田　栄

司　会　（公社）茨城県青少年育成協会 事務局長　橋本由美子

【開会】

橋本　それでは、ここから座談会に入りたいと思います。

座談会の進行は、茨城県生涯学習・社会教育研究会の大月光司事務局長にお願いしたいと思います。

それでは、大月事務局長よろしくお願いいたします。

大月　皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました茨城県生涯学習・社会教育研究会事務局長の大月です。

これから進行を務めますので、よろしくお願いいたします。　以後、着座にて進めさせていただきます。

また、茨城県ＰＴＡ連絡協議会の大和田栄事務局長が書記を務めますので、よろしくお願いします。

大和田　お願いします。

【自己紹介】

大月　これからの座談会は、「不登校・ひきこもりの子ども・若者に、いま私たちは何ができるか」について、皆さんと意見交換をしていきたいと思っています。

意見交換に入る前に、まず皆さん全員に、自己紹介をお願いしたいと思います。今回は、所属団体名、お名前、それからただいまの生越先生の講演を聴いた感想、その３点について、２分程度にまとめていただければと、そのように思っております。

それでは、大窪会長からよろしくお願いします。

大窪　皆さんこんにちは。公益社団法人茨城県青少年育成協会の会長を受けています大窪と申します。

生越先生、本日はありがとうございます。今、この会議に入る前に生越先生と少々お話させていただきました。私は、平成１３年のときに社団法人日本ＰＴＡ全国協議会の会長を受けていて、「ゆとり教育」に関わっておりました。生越先生のお話の中に、「学校化」というようなこと、当時からすごく私も違和感を感じていて、地域の力が学校と共生しながら、子どもたちが学校中心での評価から、地域の中での活動を通して多くの大人と関わりを持ち、多様な観点で評価される機会が増えればと思っておりました。

その後２０年経ってしまって、いかにして不登校やひきこもりの子どもたちに手を差し伸べられるかということをしっかりと受け止めてやっていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

大月　ありがとうございました。続いて、畠山会長お願いします。

畠山　茨城県ＰＴＡ連絡協議会会長の畠山と申します。よろしくお願いいたします。

笑いを交えた貴重なお話、ありがとうございます。

私も子どもが中学２年と小学２年と女、男でいるのですけれども、生越先生が「やっちゃ駄目だよ」と言っていたのをやはり私も一部やっていまして、管理的なというか、自分も子どもを教育するときに「あれしなきゃ駄目だ、これしなきゃ駄目だ」とやっぱり言っていたなと、「さっきも言ってきたな」などと思いまして、本当に身につまされるお話でした。

また、いろいろな、子どもとか新聞、テレビで感じていた子育てのやりづらさとか、そういったもやもやとしたものを先生のお話を聞いてぱっと光が通った思いです。筋が見えたと言いますか、整理できたと言いますか。いろいろ複合的な要素はあるのでしょうけれども、そういう消費社会とか管理、そういったものが、今本当に大きなものなのだなというのが分かり、勉強になりました。

今日もまた座談会で皆様からいろいろ教えていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

大月　ありがとうございました。

山口会長、お願いします。

山口　茨城県青少年相談員連絡協議会の山口と申します。

まず、我々の組織は、昭和４５年の１２月に設立しまして、来月で約５０年、５０歳を迎えるわけでございます。この５０年を迎えるまでの活動でございますが、青少年の安全確保、街頭・通学路・地域行事時の巡回活動、ひきこもりやいろいろな問題での声かけ等をやっているところでございます。

また、２点目としては社会環境の健全化の活動、街頭のキャンペーンとか青少年の健全育成に関わることを行っています。

それから、３点目が関係機関、関係団体との連携、育成協会ともよく連携をしてやっているということでございます。

このような活動を行い、青少年の非行防止、そして青少年健全育成、住みやすい環境づくりに日々、県内で２，２７０名ほど青少年相談員がいますけれども、努力しているということでございます。

また、先ほど申し上げましたが、５０年という月日を迎えるため、新しい青少年相談員の別名で「いばらき子ども見守りネットワーク」という愛称をつけまして、同じように３点ほど活動も考えております。

１点目が、子育て支援のボランティア、例えば市町村の福祉部門で実施している放課後児童クラブや放課後子ども教室、保育園等の補助員や子ども食堂の補助スタッフなど、相談員で何かできないかということで今考えております。

２点目は里親制度の周知活動。これらの研修会などに参加して、相談員が一生懸命勉強して周知活動を行うということでございます。

３点目は、インターネットで安全利用を呼びかけ、地域で行われるイベントなどに出向いて、新しいコミュニケーションになるような、子どもたちやその保護者にスマホやゲーム等を安全に使ってほしいように訴えるような活動をやっていきたいなと思います。

こんな活動を行い、地域や社会全体で青少年、子どもたちを見守る役割として活動していきたいなと思っています。

ただ、なかなか地域ということが今現在、難しいところでございますが、それをどうにかやっていきたいなと思います。

また、先生が先ほどおっしゃいましたけれども、斜め関係で居場所づくりやひきこもり、不登校に協力できるかなと、そういう考えでこの組織を動かしていきたいなと思っているところでございます。以上です。

大月　ありがとうございました。

長谷川会長、お願いします。

長谷川　茨城県生涯学習･社会教育研究会の長谷川です。

私どもは、青少年相談員さんと違って、設立してからまだ１１年目です。私どもは、社会教育･生涯学習に従事している専門職というか､スタッフを支援するということを第一の課題として出来上がった会です。今のところいろいろなことをやっていますけれども、子どもの問題については大窪さんのところの県青少年育成協会が中心だと考えて、そこをどうにか支援していくという形で関わっています。

感想を言うと、とても刺激的な話だったので、どこに話が行くのかというのがとても楽しみです。

一つだけ私の立場で言わせていただくと、生越先生は地域社会に期待している。地域社会のところで少し関わっているのでお話ししますと、私たちが今関わっている状況では地域社会をどう考えているかというと､「３だけとの闘い」といっています。三つの「だけ」。何かというと、コミュニティ活動の中で出てくる状況を「今だけ、自分だけ、お金だけ」、これを「３だけ」と言っているんですけれども､「今だけ、自分だけ、お金だけ」という流れとの闘いに入っています。「今だけ、自分だけ、お金だけ」、これは結局、先生が言う消費社会の中で生み出された影響が、地域社会がもうコモンズ（住民同士が共同で維持管理する社会）ではなくなって、協働するような社会じゃなくなって、すごく浸透してきていて厳しい状況にあるということだけ少しお話ししたいと思います。

大月　ありがとうございました。

続きまして、木村さん、お願いします。

木村　ひたちなか市の市民グループの「ここに種をまく」という団体の木村といいます。よろしくお願いします。

私は、この団体と併せて、学校が苦手な子と親の会「さなぎ」という親の会もやっています。そちらで何年か活動していて思うことは、不登校とかは家庭の問題とか自己責任と言われる場面がとても多いのですけれども、変わらなきゃいけないのは、この子たちを見ていると、むしろ周りじゃないかなという思いが強くなってきました。

先生の話を聞いていて、すごく実感を持ちながら、同感というか、そういう思いで聞かせていただきました。

私も不登校気質というか、ひきこもり気質なので、手汗がすごいので、温かく聞いていただければと思います。どうぞよろしくお願いします。

大月　また後でもありますので、よろしくお願いします。

次に、根本さん、お願いします。

根本　かさま不登校ネットワーク　all-unique（オールユニーク）の根本と申します。パンフレットの方はこのピンクのものを入れさせてもらいました。

あと、パンフレットには入れませんでしたが、この延長上で、仲間同士で「おばら子どもの居場所」というのを今年の７月から始めまして、異年齢の、小学生以上から高２ぐらいの子まで、平日２回ですけれども、お預かりして一緒に活動したりしています。

ちょうど今の私はそれを経験した後だったので、先生のお話、本当に、ガッテンボタンがあったらずっと押したいぐらいすごく納得して、それをここの位置で語ってくださるというのがとても心強くて今日来て本当によかったと思いました。

今回モデル事業に応募したことで、こういった活動をされている方がこんなにいらっしゃったんだと知りました。そもそも知らなかったのは申し訳ないのですけれども、困っている私たちにはなかなか出会えないんですよ、ふだん。たまたま去年誘ってくださって、集まりがあって参加したので、県青少年育成協会事務局の阿部さんがお声がけくださり、つながれたのですけれども、もったいないなと感じているので、何とかみんなでしていけたらうれしいなと思いながら聞いていました。よろしくお願いします。

大月　ありがとうございました。

次に、朝日さん、お願いします。

朝日　ＮＰＯ法人茨城居場所研究会の朝日といいます。

私は、この活動をしながらスクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーの仕事をしていて、茨城県だけではなく福島県でも活動しています。

居場所の活動を始めた時期はちょうど震災の頃で、あの頃に関わっていた子たちが、震災の最中、とても孤立の問題を抱えて大変だったという状況があって、私は、仕事の枠をちょっと越えてその子たちと連絡を取り合って、本当は

そういうのはいけないことなんですけれども、関わりを持って居場所づくりをちょっとずつ、彼らの希望に添いながらつくっていったというのが始まりです。

生越先生とは、日立市の教育研究所で教育相談の仕事をしていた頃からのつながりがあって、大学の授業を聴講させてもらったりしていました。震災の直後に生越先生の研究室に行ったら、いろいろなものがめちゃめちゃになっているのを見て、生越先生も大変な被災者になっているというのを目撃しました。

そんなことも、生越先生には久々にお会いして話も聞かせていただいて、思い出しました。学校の仕事をしながら、ＮＰＯの活動も自分で始めて思うことは、学校の価値観に取り込まれないというか、学校の思いを酌み過ぎちゃうと活動が縮小しちゃったりとか、子どもたちを活動に誘うことを躊躇してしまうということです。先生たちの思いと反する部分もあったりするし、はっきりそう言われることもあるので、すごく曖昧で不安定な立ち位置を自分でつくってしまったところもありました。その苦しさとかもちょっとあったのですけれども、今日、先生の話を聞いてすごく励まされたというか、やってきてよかったかなとちょっと思えて、実は今日、生越先生にお会いしたときに元気なの？と言われて、元気じゃないと言ったんですけれども、話を聞いた後は少し元気をもらえて良かったなと思いました。

長くなってすみません、以上です。

大月　ありがとうございました。

生越先生からもコメントいただければ。今の７人の話を踏まえてお願いできればと思います。

生越　心強いなと思いました。もちろん長谷川先生がおっしゃったように、難しさはいろいろ地域にもあると思います。だけれども、地域しかないと思うんです。なので、こういう方がいらっしゃるので、さっきネットワークの話もあったけれども、時々、これは公的かもしれないけれども、もうちょっとネットワークやっている方がざっくばらんに、それこそ親会じゃなくて世話している人会みたいな、そんなのもあってもいいのかなと思って話を聞いていました。

大月　ありがとうございました。

【活動のきっかけ】

大月　それでは意見交換に移りたいと思います。

まずは、今年度、県青少年育成協会が進める「地域を編む孤立０（ゼロ）プロジェクト」モデル事業に指定された団体を代表して、今日は３人の方に来ていただいていますので、活動のきっかけをお伺いしたいと思います。

当事者や御家族のニーズに応える形で始めたのか、あるいはまた御自身の経

験なのか、また、そこには不登校やひきこもりの当事者、または御家族にこうなってほしいという御自身の思いや、団体として目指すところがあるのかと思いますけれども、その辺りのお考えもお聞かせいただければと思います。

今度は前もって順番、根本さん、朝日さん、木村さんという順で行きたいと思います。よろしくお願いします。

５分程度にまとめていただければと思います。よろしくお願いします。

根本　よろしくお願いします。

かさま不登校ネットワーク オールユニークという不登校の子どもたちの親御さんのお茶会です。この活動のきっかけは、その当時、子どもが不登校で困っているママさんたち３人と、お子さんはまだ小さくて不登校ではないけれども、その２年前だったか、憲法改正について反対するグループがあったんですよ。その憲法９条改正に反対しようというＤＶＤを上映して回っている方がいて、その話を聞いて、笠間市がどう思っているのか市長に話を聞いてみたいと言った子がいたので、その子がきっかけで、市長さんとママさん４人との対話の会を１回設けていただいて、そのときに、憲法の話よりも不登校の話になりまして、せっかくそこで３人集まったので、今後継続して、私たちが団体になることで市とのやり取り、会話ができるだろうし、他にも困っている人がいるだろうから続けていこうということになりました。

それ以前に、私自身は、息子が小２の頃、今は中２なんですけれども、息子が小２ぐらいから学校の教室の中にいるのがすごくつらくて、学校とずっと揉めに揉めまくりながらも、友達が好きで学校に行っては、傷ついて帰ってくる日々を送っていました。ずっと５年生までは友達が好きで頑張っていたんですけれども、とうとう５年生の後半ぐらいから学校に行かなくなりました。そういう、息子のことより学校とのやり取りに私が疲弊していたときに、お隣の栃木県で親を集めて、フリースクールや、こんな考え方をしている学びがあるよというのを紹介してくれる方がいました。そこの会に行ったときに、同じようにお子さんが不登校という親御さん、お父さん、御両親そろって来ている方、いろいろな方が集っていて、本題に入る前に、自己紹介の段階でみんな涙流しながら、こういうことがあって今こんな状況でというのをすごく言っていました。そこでその話を聞けたことでも自分が話せたことでもすごく楽になったんです、私自身が。そういう意味で、お互いそういう人同士がつながるというのはすごく大事だし、力をもらえるので、それが継続してやっていこうという気持ちに繋がっています。

実際活動し始めて、少ないときは私ともう１人だったりするんですが、今は７、８人ぐらいずつ、人が入れ替わりながら来てくださっています。

今回のモデル事業で御推挙いただきまして講演会をやらせていただきまし

た。チラシを多く撒かせていただいたので、チラシを見て参加してくれた方が増えたりとか、やっぱりこういう情報を学校から欲しいという声はすごくもらったのですけれども、学校によって学校が止めちゃったり、そこはもう校長先生の裁量なので、まずつながりたいけれども、つながるルートが場所によって遮断されているんだよなというのは、きついなというか、要はそこに関わる人の思いで多分結果が変わってきちゃうんですよね。

だから、さきほどの先生のお話を聞きながら、例えばこういう場でも、立場が違うから考えも違うんだけれども、違うのをちゃんと表に、テーブルに乗せるということ自体に私たち世代がまだ慣れていなくて、違う意見が来ると否定されたと思ってしまうんですが、そうじゃなく、ちゃんとテーブルに乗せて話し合う練習というのが私たちも必要で、だから親の会の中でも、否定せずに聞いて、とにかくジャッジしない練習をひたすらやっていくしかないなと今すごく思っています。

あと、御家族にどうなって欲しいか。この間の講演会でもアンケート取ったんですけれども、ある程度情報が入って外に目が行けば講演会に来てもらえるのですが、困っている最中というのは家庭の中で悶々と、自分だけが悪いと思って、本当に親御さんも自己否定がすごく強いんですよね。特に昭和生まれ世代はそうなんですけれども、蓋を開けてみたら、全員がそうなんです。講演会に参加した参加者さんから感じたのは、ダメな自分を見られたくないというか、恥ずかしいと思っていて、なるべく外に出さなくしているし、でも本当はみんな同じ悩みを抱えているというのを知る機会がもっと必要かなと。人と関わる、どんな形でもいいから関わる何かをどんどん生んでいく必要があるよなというのをすごく思っています。

そういうところで出会って、多分それぞれに意見は違うから、意見の合う人とどんどんくっついていけばいいと思うんです。私も「おばら子どもの居場所」というのを始めたんですけれども、基本、もう学校なんか行かなくていいよというお母さん方が多くて、だからこそ農業とか、そういう自然界のものに意識が強い方がたまたま今は集まってきています。そういう興味、関心が１個あったら似たような人が寄ってきて、その作業をしながら、それでもマル、それでもいいよねとやっていける。月にたった２回なんですけれども、そういう場があると、いざ来てみたら、お母さんが結局１日中しゃべっていたりするんです。やっぱり聞いてほしかったんだなと思います。子どももそっくりで、全然ネタは自分のことじゃないですが、演劇や、宝塚の誰さんが好きでというのを１日中しゃべっているんですけれども、何でもいいから聞いてほしくてしゃべっていて、というのを、まさに家族じゃないメンバーでもいいから聞きっこして関わっていくという、拠点がどんどん増えてほしいなと思っています。

大月　ありがとうございます。

朝日さんお願いします。

朝日　私は、先ほどの話でちょっと触れたんですけれども、活動のきっかけは東日本大震災で、当時私が担当していた中学校の別室登校という不登校の子たちが使っている教室があって、そこの子たちとの関わりがスタートです。

別室を利用する子たちはいろいろなレベルがあって、毎日来ている子もいれば月に１回来るかなみたいな子たちもいたんですけれども、とにかくそこを使っていって、なおかつ私とちょっと関わりのある子たちを中心に、震災の直後に、学校もその頃どうしていいか誰もが分からなくなっていたし、正しい判断というのは誰もできなくなっていたので、そのどさくさに紛れて、家庭訪問に行って生存確認をしたり、電話がつながる子には電話をして居場所を確認したんです。当時中３だった子は、卒業式は終わってしまっていて、なおかつ通信制とか高卒認定試験を選んだ子たちが結構いて、そういう子たちからは、僕たちこれから誰に相談すればいいのかな？みたいな話も出てきていました。もしも震災とかなければ、何かあれば役所とかに相談すればと言ったかもしれないのですけれども、ちょっとそういうことは言えない感じがして、伸ばされた手を離せない感じになってしまって、そのまま毎月１回近くの交流センターに集まって生存確認しようねみたいな、生きているかどうかお互い顔だけでも見ようよみたいな感じになって、その学校の最寄りの交流センターを借りて集まり始めたんです。

そのときに、場所がいつも決まらなくて、あちこち借りながら移動していたので、何かみんな次の場所どうするみたいな感じで、それで名前が居場所研究会になっちゃったんです。居場所をどうしていくかじゃなくて、居場所の居場所を探す研究会みたいな感じでやり始めて、今回はあっちを借りようとか、今回は中学校の先生がいいと言ってくれたから相談室でみんなで会おうかみたいなのもあったりして、毎回、最初は場所が定まらなくて、あちこち行っていたんですね。それがスタートで、当時いた子たちは、学校には余り気持ちは向かないけれども、考えたり発想が豊かな子たちが多くて、何かいろいろおもしろいことを考えてくれて、つながっていったという形です。当時、その子たちとの震災直後のやり取りは、私はセーフティーネットだとか思ってやっていましたけれども、私自身もだいぶ救われました。当時まだラインがなくて、メールだったり、携帯がない子も結構いたので、保護者の携帯を使って連絡してきている子たちもいて、地震があると、みんな大丈夫ですかみたいなことをメーリングリスト（メールの一斉送信）に流す子がいたり、ここに行くと何が買えるよみたいなのを流したりとかしていました。実はその関わっている子たちの中に、お母さんとその子だけで余り親戚付き合いとかもしていない子たちが結構いて、そこのささやかなメーリングリストの情報が結構大事だったおうちと

かもあって、結構みんな大変だったんだなというのをすごく感じたりしました。

私は、傍観者みたいになって、みんな仲良くやっていたらいいやと思って放っておくと、連絡をしてこない私を心配した中学生が、今どこにいるんですかみたいなメールとかくれて、さっき生越先生が斜めの関係とおっしゃっていましたけれども、どちらかというとピア（仲間）というか対等な関係性で、私のこともみんな支えてくれようとしてくれていたなということをその直後に感じています。

そういうことがきっかけで、最初は小さい中学校の別室の子たちのためだけに始めたんですけれども、結局続けていくうちに気がついたら２年とかだんだん時間がたってきて、中には学校を卒業して、居場所も卒業して進学したり、３年たったあたりでは大学進学で東京に行った子とかも出始めました。そして、これからどうしていくかといったときに、このままやめちゃうか、もうちょっと開けた場にしていくかどうしようかということを、参加している子たちと相談して決めようとしたら、ずっと必要な人もいるし友達も来たいと言っていたから続けたほうがいいよみたいなことを言ってくれたので、その流れもあって法人化というふうに進んでいったわけです。余り私が決めてこうしたいというよりは、一応子どもたちのいろいろな思いも酌みつつ、大人として何ができるのかなというのを考えて組織化していったというのが今の現状かなというふうに思っています。そこがきっかけです。

活動としてはいくつかやっていて、開けた場というか、居場所カフェというのは月に、今、日立と北茨城で１回ずつやっていて、それは誰が来てもいいですよという場所にしています。実はそれは居場所の入り口にしていて、お試しに１回来てもらって様子を見てもらうという形です。あとはもう完全に若者だけの公募をしていないクローズの居場所があって、そこは１回お試しに来てもらって、こういう子たちが来ているよというのを何となく顔合わせみたいのをしてもらって、大丈夫そうだったら参加を誘うみたいなのがあったりとか、あとは保護者の集まりもやっています。あとは県立高校で居場所カフェというのをやっています。あと今回頂いた助成金を使ったりとかして啓発活動も含めて講演会の企画を立てたりしているというのが、今私たちが主にやっている活動です。あとちょっと市民農園を借りて細々とやっていますが、みんな気持ちが乗るときは行って耕して何かやるんですけれども、やらないときはすごい草がボウボウで、周りの人たちが心配して手伝ってくれたり、知らない人に種や苗をもらったり、ボウボウになった草を全然知らない人が一緒に手伝って草取りしてくれたりとかするということもあって、畑でも不思議なコミュニケーションを取っているんです。このようなことを今活動としてやっています。

なので、私たちの団体の目指すところというのは実は余りないというか、流動的なんです。結局、そのとき、その子たちが何をしたいかというのを酌んでやっているので、こうやるぞとか、こうなってほしいというのは余りないなというのは正直なところです。

今回いただいた助成金は、３回オンラインをやったんですけれども、義務教育までというのは結構みんな手厚くやってもらえていて、県とか教育委員会とかいっぱいいろいろなことをやってくれているんですけれども、実は１５歳から２０歳というのはすごく空白というか、一番しんどいのに放っておかれちゃっている感じが私の中にはあって、そういう子たちが少しでも自分は１人じゃないなとか、やる気がちょっと出るといいなと思って、こういうふうに助けてくれる人たちがいるよというのが伝わるといいなと思って３回企画しました。

１回目は東京でホームレス支援などをされている方で、実際ご自分もネットカフェ難民みたいなのを体験して、今はもう３０代後半なんですけれども、若者のときに大分苦労した方が貧困問題についてお話してくれました。２回目は高卒認定試験の支援をしたり、若者サポートステーションでキャリア支援をしている若者のキャリアの部分の話をしてくれる方に講演いただいて、３回目は不登校経験をしてその後その仲間たちで起業している人たちが話をしてくれました。そんな感じで情報を、こういう人たちもいるよというのを知って元気になってもらえるといいなと思って企画させていただきました。

初めてのオンラインで私もよく分からないで企画して、ちょっと挑戦だったんですけれども、今回やらせていただいて私も勉強になりました。講師の方たちもそれぞれ苦労されてきた方なので、そうやって話す機会をもらえてよかったとみんな言ってくださって、みんな元気になる感じでした。ありがとうございました。そんな感じでやっています。

なので、私として、当事者とか家族にどうなってほしいかというのも実はそれも余り考えていなくて、取りあえずそれぞれが思うようになっていってくれたらいいし、それに付き合えるところは付き合いたいし、何より命に関わる問題が私たちの居場所にも少なからずあるので、生きていてくれればいいなと、取りあえず今日も生きていてくれたらいいなと毎回思っています。そんなところです。私からは以上です。

大月　ありがとうございました。

木村さん、お願いします。

木村　活動のきっかけですが、大きく言うと、我が子が不登校になったことがきっかけです。それで、不登校になると情報がないので、すごく勉強して、いろいろな講演会に出たりとかするんですけれども、その中で、ただ解決されるのを待っているだけというか、救世主が現れるのを待っているだけでは何も変わらないなと思い始めたことです。

私も栃木の話になるんですけれども、結構あちらは不登校の活動とか活発で、不登校の当事者のお話を聞く機会があって、話を聞いているとすごく大変な思

いをされている方だったんですけれども、とてもきらきらと話されていて、何かそれを聞いて、こういう存在は私たちのような親子の光だなと感じたんです。それで、何か自分にできることを頑張っていったらいつか誰か１人にとってでも、自分自身も誰かの光になれるようなときが来るんじゃないかなと思ったんです。そうしたら、それまで苦しいと思ってきたけれども、その経験も無駄じゃないと思えたので、それが活動のモチベーションになっています。

ただ、自分たちとか、周りの身近な人たちが直面している問題を、どうにかしようと思って向き合って動き回っていることが、ただ周りから見ると活動している団体というふうに見えているだけという状態ではあるんですけれども、きっかけはそんな感じです。

すごく話が短くて、皆さんのように話せないんですが、不登校やひきこもりの当事者、御家族にどうなってほしいかというのは、それは私も余り当事者や家族にどうなってほしいかというよりは、どちらかというと周りのほうに求める部分があるんですけれども、不登校とかひきこもりになると、どうしても期間が長ければ長いほど自己否定がすごく深まってしまって、それが元気になっていく最大の壁になるんです。どうしても早く普通に戻りたいとかと思ってしまうんですけれども、普通に戻りたいとかというよりは、どうしたら自分が幸せに生きていけるかというように考えられるといいなと思って、でも、そのためには周りが厳しいまなざしじゃなくて温かいまなざしに変わっていくことが必要だなと思っています。

短いですけれども、以上です。

大月　ありがとうございました。

【団体の活動について】

大月　それでは、今の３人のお話を伺って、今度はこちらの４人の会長さんにそれぞれの団体、今のお話を聞いた感想、そのほか御自身の団体で既に取り組んでいるようなそういう事業があれば、それをお話いただければと、そのように思います。

大窪会長からお願いします。

大窪　ありがとうございます。

先ほど、かさま不登校ネットワークの根本さんが、こんな仲間がいるんだとか、こういう事業をやっている人たちがいるんだとお話されたんですけれども、実は私、この事業に立ち上げる前年の平成３０年のときに、若者活動応援事業という県の事業に私どもの団体が取り組んで、県内の若者団体の事業発表会が会場のホテルレイクビュー水戸であったんです。そのときに、昨年度このモデル事業を受けてくれた、稲敷市の『まちキッチン「あえる」』という団体、これ

子ども食堂関係やっていたんですけれども、その活動は与えるだけじゃなくて、子どもたちに冷蔵庫にある食材で小学校低学年でも自ら空腹を満たす料理を作れるようにしようと、体験と子ども食堂の組合せ、そういう活動の若者に出会ったんです。その若者から、自分たちのやっている活動というのはすごく自信を持ってやっているんだけれども、地域のＰＴＡや地域の団体とつながり方が分からないという話があったんです。まさしく年代差がありますから、保護者ともつながる機会とか。そういうところでつなぐ役割があるのはうちの協会ですねということで、考えました。

それと、今日、長谷川先生いらっしゃるんですけれども、こういう子ども対策というのは、関係づくりを大いにできるのは、市町村民会議を構成している大窪さんたちの協会が一番だよねという話も事前にあったものですから、「地域を編む孤立０（ゼロ）プロジェクト」ということで、不登校・ひきこもり、貧困、居場所づくり、３大柱でスタートしました。

昨年の８月２７日に１回目の研修会をやったんですけれども、茨城新聞の告知記事掲載のおかげで関係団体など参加者が自由に応募して研修会を行えたときに、ひきこもりの子の保護者の方にもおいでいただきました。その中で「ひきこもり大学茨城キャンパス」の大谷さんが講師になってお話していただいて、彼は今でも当協会の事業に関わってくれています。

地域を編むということですから、要は１年終わったらさよならじゃないんです。今３団体の方は活動中ですから、アドバイザーもいますので、そのアドバイザーとともに今年度事業が終わった後に、その経験を前の年度の、要するに翌年度には他の団体とつながり合って、どんどん膨らませていって、地域を編むというのは人と人が編み込みながらノウハウを渡したり、人と人とを広げていくことが一番重要だと思っています。

当協会は、今年はその事業の研修会を８月５日に予定していたけれども、新型コロナウイルス感染症の拡大によりできませんでした。来年度、この感染状況が変われば、当然今まで関わってきたいろいろな団体の方々のノウハウを生かして、常に人と人を繋げながら、さらにノウハウを広げながらやっていきたいと思っております。ぜひ、私はその活動自体よりも人の輪を広げながら、地域を編み込むところの手助けをやっていきたいと思っています。

ただ、私には夢がありますけれども、もし次の番が回ってきたら、その夢を皆さんにお話させていただきたいと思います。以上です。

大月　ありがとうございました。

続いて、ＰＴＡとしての取り組みで何かございましたら。あるいは会長個人の御意見でももちろん差し支えありません。

畠山　貴重なお話ありがとうございます。

皆さんが本当に子どもに寄り添って活動されているというのがよく分かり、本当にすごいなと思いました。

私たち、茨城県ＰＴＡ連絡協議会は、創立してからもう７３年ぐらいを経ています。大窪会長さんが会長の大先輩でもいらっしゃるわけですが、今、県内には公立の小・中学校・義務教育学校は約７００校程度ありまして、私どもはその７００校のＰＴＡの連絡協議会という形になります。

茨城県ＰＴＡ連絡協議会が、直接子どもたちとやり取りをするというのは基本的にはなかなか機会はありませんが、それぞれの学校には略して単Ｐと呼ばれるものがあります。通常単位ＰＴＡと呼びますが、その単位ＰＴＡはいろいろな活動をしていますので、皆さんの単位ＰＴＡが活性化できるように情報共有をしたり、指導者研修会などと言いまして、みんなで集まって勉強したりとか、そういう企画を行っているのが私どもです。

ただ、やっぱりどの業界もそうですけれども、コロナ禍で集まれなくなってしまって、我々の強みである保護者が集まっていろいろな情報交換をして、よりよい学校のＰＴＡとか家庭教育をやっていくという、それがちょっとできなくなってしまったので、今、事務局長と連携しながらホームページのリニューアルとか、フェイスブックでの情報発信というのをちょっとやり始めようとしています。

その目指すところは、県内７００校あると、大子から県南の方まで、いろいろなことをやっている学校があって、その情報をなるべく、あまり風呂敷を広げ過ぎるとあれなんですけれども、データベース化したいなと思っています。

それがあることで、例えば守谷のほうではこんなことをやっているんだというのを大子のＰＴＡの方が気づく。これは真似っこでもいいからうちらもやろうよと、そういうことをやれるようなインフラにしたいなと思っています。

やっぱりＰＴＡ活動が活性化すれば、当然我々保護者が成長することにもつながり、そうすると各家庭での子どもたちとの関わりであったり家庭教育と言われるものもより良くなるだろうと、そういうことを信じてやっています。

ただ、我々もだんだん増えてきている不登校のお子さんへの関わりという点では、もちろんアンテナは立てているところですが、なかなか直接的な取組というのはまだできていないところです。

ただ、先ほど申し上げました情報の共有、データベース化をすることで、皆さん熱心に活動していますので、７００校の中でおそらくそういう取組をやっているところもあると思います。そういった事例を取り上げて、各々がつながり情報の共有をしていければと思います。また、皆さん困ってはいるけれども、皆さんのすばらしい活動についても多分分からないところは多いと思います

ので、情報があればやれるのにというケースもあると思います。そこをちょっと我々としては、側面からになりますが、御支援していきたいなと思っております。

大月　ありがとうございました。

　続いて、山口会長、お願いします。

山口　５５分から休憩かなと思いまして。

　先ほど木村さんがおっしゃいましたけれども、温かいまなざし、やはり地域の力が必要と痛感しているところでございます。特に青少年健全育成も必ず地域の力が必要かなと思っているところです。また、私の昔からの考えで、いじめや諸々についての子どもたちに絡んだ教育は、幼児教育また家庭教育が大切だと考えています。

　そこで、青少年相談員の活動の一つとして、子どもたちが生きる力や将来自立するために必要な力を身につける大切な場所は家庭であるということを根幹としています。しかし、様々な事情で自分の家庭で暮らせない子どもたちがいます。そこで、家庭の教育や幼児教育を保障するために、我々は里親制度の普及に力を入れていこうと考えて、青少年相談員が頑張っているところでございます。

大月　時間なんですが、あと１人、長谷川会長にお話いただいてから休憩に入りたいと思います。

長谷川　私、実は、１９８０年に東京から茨城に戻ってくるんです。そのときに、東京で大きい学習塾を経営していまして、すごく儲かっていたんです。そのときに、足立区で大きなドラム缶に女子高生を詰めて殺した殺人事件がありまして、その問題に関わってきていて、そのときに仲間が東京シューレという、不登校の、登校拒否と当時は言ったんですけれども、登校拒否をどうする会というのができあがって、そのときに私たちの仲間で子どもの人権研究会というのを作ったのが最初です。だから、今から４０年前です。

　そのときに登校拒否と言われていたものが、当時は自閉症とごっちゃになるんです。登校拒否と自閉症が。そのぐらい分かっていなかったんですけれども、それが不登校というふうになっていって、うちでは今喫茶店をやっています。たまり場カフェみたいなものです。そこの中に不登校の子どもたちが来るんですね。３人女の子が来るんですよ。それは同じ学校ではありません。ただ、不登校のネットワークの中でお母さん方がネットワークを作っていて、ひたちな

かの子どもだとか、一緒に入って３人全然違う女子中学生が来るんですよ、遊びに。

そこで、本当に何かというと、同じ学校だったらすぐ仲間になれるのにと思ったら、実はそうじゃなくて、同じ学校というふうになるとすごい同調圧力というか、タガがはまっていくんですね。そこから外れたほうが子どもらしさを発揮できるような子どもたちがいるということです。つまり、同じ学校じゃないのにすごく仲がいいんです。うちに来て何をやっているかというと、今、「人間の秘密」という講座を開いてやっているんですよ。つまり、学校では教わらないような、人間が幸せになるために何をやってきたんだということを中学２年生に、大体２時間ぐらいやるけれども、すごくおもしろがって勉強していきます。本当に学びということが楽しいことだと分かってもらえない学校は何かなと思うんだけれども、それは子どもたちが置かれている状況なんじゃないかなと思っています。

それから、もう一つは、地域社会のところで言うと、先ほどからいろいろなのが出てきているけれども、私は地域福祉ということに関わっています。今、中心はごっちゃの思想、ごちゃ混ぜのごっちゃです。ごっちゃの思想で新しく組み立て直さなければ、地域社会を理想的に言うけれども、地域社会は真綿で首を絞めるような同調圧力がかかっているところですよ。学校もそうだし、会社もそうだけれども、地域だって例外なく、やっぱり変なことをすると冷たい目線があるんですよ。そこの中で、「ごっちゃ」という思想をどうやって広げようかとぶつかっているところです。

だから、さっき大窪さんが言った「あえる」という団体の考え方みたいなところが、とても私たちにこれからの形を教えてくれる。「あえる」というのは料理の「和える」なんです。ということで、今日、３人の方の話を聞いていて私たちと同じ思いを持っているんだなというふうに思いました。

ここからは、どうやって地域を変えていくかという問題にぶつかっていくんだけれども、あまり地域に入らないほうがいいかな。地域には地域の実情があり、地域の課題にはその背景がある。その実情や背景を理解して発言することが大切。地雷ばかりなんだ。以上です。

大月　ありがとうございました。

一応４人の方から御意見伺いまして、ここで先ほど山口会長からありましたけれども、換気のための休憩。

長谷川　心の換気ね。

大月　心の換気も含めます。

３時１０分から。５分ちょっと休憩にします。

～～～休憩～～～

【意見交換】

大月　それでは、１０分よりちょっと早いんですが、終わりの時間は決まっていますので、そろそろまた始めたいと思います。

ここで、今日のキーワードの一つに「つながる」というのがあったと思うんですけれども、こちらの発表していただいた３つの団体の方と、できればこちらの４つの団体、それ以外も団体あると思いますけれども、つながるきっかけにはなったと思うんです。よりつながりを深めるためにはこんなことという、３つの団体のほうから、何でもいいです。質問していただければ、答えられる範囲で答えると言っていますので、これは指名なしで、手を挙げていただきたいと思います。

朝日　長谷川先生がされている活動について、もうちょっと詳しくお聞きしたいなと思いました。

長谷川　私の活動ですか。

朝日　さっきの人間の秘密のこと。

長谷川　研究会の活動の一つで、関東近県といって、群馬とか栃木だとか、関東近県の都道府県の生涯学習･社会教育研究者が一堂に集まって、茨城県で毎年大会を開いています。その中で、子どもの問題、子どもの人権の問題とかというのは分科会でずっと話されてきているんです。

それから、私と大月先生になってから、県内の県域交流ということで、各県北とか県南とか県西とかという順番で、「はじめの一歩」という社会教育活動をしています。その中で、今年は鹿行というところが中心になっていて、鹿行生涯学習センターで県域交流をしますけれども、ここも子どもの問題に焦点が絞られていて、子ども食堂だとかひきこもりの問題とかが分科会で話されて、全体のシンポジウムをやるのがこちらですから、ここにいる２人（大月・橋本）が中心になって、ほかに施設の長とかが来てその問題を検討することになっています。

だから、うちは遅ればせながら子どものひきこもりの問題に入ってきたところです。ずっとその関心はあったんだけれども、研究会全体としては大窪さんのところの青少年育成協会と足並みそろえてやっていこうねというところからスタートしている、そういうことです。だから、あまり問い詰めないで。

私としては、当事者の会とか父母の会とか、そういうのに参加しています。その中で、いつも言うのは何かというと、ひきこもりは孤立していないと言っています。ひきこもりというのは、ひきこもりをするときには必ず“ひきこもりという状態を支える人”がいるからできるんです。つまり、ひきこもりは１人じゃできない。家族がいるからできるんだ。その家族とのつながりをもう１回改めて確認しようよねと。家族がこの状況を一緒に取り組んでいく、家族が対立するのではなくて、家族が一緒に組みになって、この状態を認識していく

ような形にしていこうよねというのが合い言葉でやっています。
大窪　それは、ひきこもりキャンパスの大谷さんも去年の発表の中でそういったことの家族とか親のこととか気にしながらひきこもっていたという話をしてくれて、結構いいキーワードを彼は投げかけてくれました。だから、彼もずっと私たちの活動に関わってもらおうと思っています。
長谷川　本当にそうなんだよね、みんな孤立して感じているんだけれども。
大窪　１人ではひきこもれないんですよね。

長谷川　それから、もう一つ言っているのは、ちょっとここは生越先生と違うところなんですけれども、社会に出る、外に出るときに、とても勇気が要る。その勇気はどこから来るかというのはやっぱり議論になっていて、レジリエンス（しなやかに適応して生きのびる力）、つまり、そのときのエネルギーというか、自己を肯定していくと、生越先生が言った自分を肯定できなければなかなか難しいんだけれども、一歩外に出ていくときに、ひきこもっているこの状態自身も社会なんだよと言っています。だから、社会に出て行くのではなくて、この状態も社会。それはとても発想を転換させようと思って言っています。
　「てふてふの会」というところに参加しているんだけれども、ひきこもり支援読本という本をこの前作ったんです。支援読本という本を作ったんだけれども、支援じゃないよねと。支援するというのは支えてあげるという視点だけれども、違うよね。これを一緒に作っていこうよねという、これからひきこもり共演読本という名前に変えようというふうに考えている最中です。
大月　連携先などとして、こんなことがあればもっと密にできるとか、何かありますか。
根本　事前に送ったパンフレットにも入れさせてもらったんですけれども、不登校の親の会とか、居場所の載ったホームページを作りたいと思っています。まだ全然途中で申し訳ないんですけれども、これがあるよという情報、お子さんよりも、お子さんが不登校になって、多分最初に親が自分を否定された気分にイッキになるんです。そのときに外に出るのは無理なので、まずは情報検索するだろうと思います。ネットで情報に出会えるのが第一優先だよなと思うので、これを作っていきたいということで、作り始めてまだ途中なんですけれども、ＰＴＡさんのほうから配ってくれるといいなと思っています。そういう情報は、学校経由だと止まることがすごく多いと感じています。基本、考え方として、やっぱり先生方は、多分無意識に学校に戻るのが一番で、頑張れと言ってしまうという話を聞きました。そういう声かけと意識の中だと、行かなくてもこうして笑っていられる子もいるという方向に促すようなことはしたくないと言って情報が止まっちゃうことがあるので、それというのは立場の話なも

のですから、本当に今困っている子にマルができるものがあるということを知って欲しいと思っています。

とりあえず、つながって欲しいです。情報の行き来がもっとできたらなと。

畠山　私もお話伺っていて、皆様のように活動されている団体があるというのは知っておりましたけれども、具体的にお名前とかは存じ上げなかったし、きっと皆様のほかにも県内でやられている方もいらっしゃると思うので、我々としては、事務局長と相談しながらになりますが、ぜひリンクを貼らせていただくというところからまず始めさせていただけたらいいなと。

やっぱり保護者がいて子どもがいれば、当然学校に通っているお子さんと、今は通えていないというお子さんがいるわけで、学校の先生は、ポジショントークではないけれども、お立場上、学校に来てねとどうしても言わざるを得ないのでしょうから、我々保護者ですから、どちらのお子さんも我々の子どもなので、そこはそういう形で連携させていただければと思います。

我々もぜひ何とかしたいと思うので、こちらこそよろしくお願いします。

根本　あともう一つなんですけれども、これまだ、大別してまだ４グループのうちの２カテゴリーしかできていないんですけれども、一番初めの一歩というのは、まずは親の会とかではなく、やっぱり行政に調べに行くと思うので、情報を知ろうというページがまだ全然できていないのに言うのは風呂敷広げ過ぎなんですけれども、そこはやっぱり行政にはこういうものがあって、こういう活動しているよというのをなるべく分かりやすくお伝えしたいので、そこを作り始めたらぜひ御協力をお願いしたいというか、アドバイスいただけたらうれしいなと思います。

多分、行政の皆さんというか、協会のような団体の方にとっては当たり前のことを多分全然知らないので、その知らない親御さんが見ても分かるように、こういうサポートがあるというのを図にしたいです。御協力よろしくお願いします。

大月　主に県青少年育成協会ですかね。

大窪　不登校やひきこもり支援の事業を始めて、不登校の子どもたちを行政が見るようなところがあるんですね。そういうところに私は訪問してきました。たまたま私の知人で、保護者の知っている方のお孫さんが不登校になった。それで、その公的施設に通ったんですけれども、そこにもなじめなかったけれども、また通ってみようかなと思ったときに、自分が不登校になった原因の学校が窓口になっているんですよね。そこの窓口にお願いして、市の教育委員会を通してそこの不登校の施設に入る。それがすごく嫌だというんです。自分が不登校になった原因の学校の担任や校長を通して、そこの施設に行くのは嫌だという話。うちの副会長の鈴木一司先生もそういうところに関わっているので、

そういうことも改善できればいいなと思ってはいます。

そういう根本的な行政の関わり方も、少しずつ方法や考えを変えたいなというふうに思っています。

それと、ついでに、夢の話、質問してくれないから言っちゃうんですけれども、1階にスペースがあるんですよ、青少年会館には。それで、整備をしていくんですね。１５歳から２０歳が要するに手薄だという話もあるので、まさしくｅスポーツとか、家庭にこもっているお子さんというのはどちらかというとゲームをやっている子が多いと思うんです。この会館でそういうツールを使って、県内の高校にｅスポーツ部などができていると聞いているので、私は詳しく分からないのですけれども、当協会の事務局に少し詳しい職員がいますから、そういうところとつながって、少しの人数でもいいからここでｅスポーツの会場になって、興味持っている子がいるから来ると思うんです、お客様的に。２年目は、逆にお客様じゃなくて企画側に回るようにして、自分がこういうところに来たら主役になれるとか、話ができる場だよということで、茨城県のｅスポーツの甲子園みたいなのができたらいいなと思っています。

また、昨年度、地域を編む孤立０(ゼロ)プロジェクトのモデル事業を受託していただいた『まちキッチン「あえる」(稲敷市)』の子ども食堂ですが、月に数回の食事を提供するだけの事業ではなくて、参加した子どもたちが家にある食材を使い、自ら調理し、空腹を満たすことができるようになる体験型の子ども食堂に取り組んでいる団体でした。将来、様々な困難を自分で解決する力につながることと思います。これからも色々なモデル事業を当協会から発信していけたらと思っています。

ただ、ｅスポーツだけじゃないですよ。もっと何かほかに案があればそれはそれで考えればいいなと思っているんです。

いろいろなものを工夫しながら、子どもが一番興味持っているものをステージにあげて、そこに、ちょっと主役になってくれるような気持ちになってもらえたらうれしいじゃないですか。

山口　１０月２５日にかさま不登校ネットワークで講演を聞いたんですけれども、自由奔放に育ったと、だから子どもというのは自由奔放に育てたほうがいいという講演を聞いたんですが、根本さんはどう思いますか。

私は、個人的に厳しさも教えたほうがいいんじゃないかということを思っているんですが、講演を聞いていかがでしたか。

根本　私は、本来奔放でいいと思っています。

厳しさ、圧をかけることも、体験が必要だと前は思っていましたが、私がかけなくても、いつかは出会うと思う。それをわざわざ親がやる必要はない。本

当に安全基地で安心できる場所が絶対必要というほうが優先されると思います。

その成功例として、先日の講演会での講師の佐伯先生がそういう育ち方をされていたので、アリだなと思っています。

長谷川　そこは意味があるということが大切だよね。子どもたちにちゃんとなぜこうなのかというのを説明しないと駄目ですよね。なぜ挨拶するの、なぜこうなのということを、人間の幸せになる秘密なんだ、魔法なんだ、これは私たちが幸せになるために長い間かけて手に入れてきたスキルなんだと話すと、ちゃんと入っていきますよ。

根本　私もいま子どもたちを預かって、来てくれる子たちを見ると、何でこれをやるかという理由が分からないままやらされることが多過ぎて、そこを長谷川先生のように伝えられればいいなと思いながら接しています。

長谷川　何でこうするのと分からないまま学校が進んでいる、生越先生の話にあったじゃないですか。かわいそうだと思う。

大窪　学校で何点取ったの、何人百点だったのと聞くじゃないですか。そういうのが評価になっているわけですよね。それの中に子どもは当てはめられているわけですから、それは大変なことですよ。

根本　親側も疑っていないですよね、問題にぶち当たるまで。

大窪　私は、もうちょっと地域とか家庭に責任があるために教育改革があるはずだったと思っているんです。それで、教育基本法も変わったはずなんですけれども、ところが結局、議員さんたちが、ゆとり教育というのは学校の先生も週休２日制だろうなどという視点で考えるからこんなふうになったと私は思っています。もうちょっと文科省も頑張ればよかったんですけれどもね、駄目でした。

だって、レインボープランと言ったんですよ、当時の教育国民会議が、レインボープランと。虹は消えちゃったと私は言っています。

大月　あとは、どちらからでもいいですけれども、お互いにどうぞ。

山口　ちょっと生越先生にちょっと聞きたいんです。

今、菅総理大臣がデジタル化ということで、子どもたちも全部こういうのを持たせるというようなことですけれども、落ちこぼれが増えちゃうような、さっき先生も言いましたけれども、字を覚えないとか、そういう学力的な低下が起きるのではないかと不安に思っているのですが、いかがですか。

生越　僕がそれにあまりきちっと答えられるあれはないのだけれども、使い方だと思うんです、僕は。例えば、不登校の子どもが学力保障されていないじゃないですか、今。日本の学校は全部通過させちゃっていますよね。例えば、不

登校の子どもに、さっきのｅスポーツじゃないんだけれども、メリットがある場合もあるわけですよね。ただ、あれを、僕は今、コロナ禍のためにインカムを使って授業をやっていますけれども、やっぱり足りない部分があるのは事実だと思うんです。

だから、いろいろな使い方によってはポジティブな意味を持つし、あれがもう絶対視されて、どんどん人との距離が全くつながらなくなってくるような使い方をすればマイナスだと思うんです。だから、そこは、学校は、下りてきたらそれをそのとおりにやらなきゃいけない、そこに危険性がある。僕はそういうふうに思っています。ただ、使い道が良ければそこそこ、逆に不登校の子どもなどは助かる子がいるんじゃないかな。

大窪　今日、お出でいただいて、ただ、このコロナ禍の中で活動していくのは大変だと思いますけれども、ぜひ負けないで来年はしっかりと当協会もまた研修会を開きます。そのときはぜひ３団体のお力をお借りします。

それで、私は組織同士のつながり、イコール、代表とか組織に関わっている人のつながりが一番重要だと思っていますので、今後の事業の継続性も含め、活動費の助成は数万円だったかもしれませんけれども、ぜひ重荷に感じてください。よろしくお願いします。

あと、うちの協会は、「親が変われば子どもが変わる運動」と言って、平成１０年からずっと活動していたんですけれども、今は「大人が変われば子どもが変わる」ということで、柱にはあるんですね。大人というと、子育てしている親で、ＰＴＡに関わっていたころは「今の親は」と言われるのが嫌だったんですよ。今時の親は子育てもできない。その後、茨城県は地域親という名前が出てきて、地域に住む大人たちが親ですよということで、保護者に係る地域親運動というのがあったんですね。それで、地域親で、要するに今、子育てしている真っ最中の保護者だけじゃなく、みんなも、先生も、じいちゃん、ばあちゃん、兄ちゃん、姉ちゃんも一緒になって、地域親として子どもを見守ろうという体制はつくってきたんですけれども、まだまだそれは夢の途中です。でも、そういう意識はこれから大事だと思っているので、ぜひよろしくお願いしたいというふうに思っています。

大月　ＰＴＡの会長、畠山さん、特にお聞きしたい、あるいは今日の感想等、会長御自身の感想等、お話いただければと思うんですけれども。

畠山　先ほどのお話の繰り返しになりますが、私の子どもが通っている学校でも不登校のお子さんはおりまして、本当に何とかしたいなという思いはあった

んですけれども、やり方が分からず今日に至っていた中で、お三方のお話を聞けて非常に良かったと感じています。私たちはどうしてもＰＴＡ活動を熱心にやっているところのベストプラクティス、いわゆる最も効率の良い方法を県内で共有しようとしがちです。それはそうなのですが、ちょっと抜け落ちている部分があるなというのはどこかには思っていました。先ほど根本様から連携の話をいただいたので、本当にありがたいお話だと思います。保護者の方の悩みの解決というところが、我々県内で７００校組織している意味合いの一つでもあり、学校へ通えないというお子さんが、これから増えてしまうという可能性もありますので、ぜひ今後もホームページのリンクとか、個人的な考え、アイデアですけれども、もしかしたら広報紙を活用するなども考えられるかなと思っています。

なお、本会の広報紙は、本年度から全家庭に配付としています。今までは各学校に２０部配付して「配ってください」というスタイルでしたので、２０名しか生徒がいなければ全員に配られていたんでしょうけれども、学校によっては全然足りないという状況でした。今回、コロナ禍というのもあり、会員の皆様とのつながりを大切にしたいと考え、約２０万会員の皆様に配付をするということにいたしました。実際の配付は１２月になります。紙面が限られておりますので今回は無理ですけれども、今後もし可能であれば、そういうところにちょっとＱＲコードを貼り付けるぐらいのことはもしかしたらできるかもしれないと思っています。

そういった形でちょっとずつ連携させていただければと思います。

大窪　茨城県のＰＴＡは全国で一番活動しているところだと思っています。加入率もどちらかというと。全国大会、関ブロに参加するのは茨城県が全国で一番だと思っています。

大月　それでは、お二人お聞きしたんですけれども、あと５人、思うところを本当に１分以内でお話いただいて、最後、生越先生にまとめていただきたいと、そのように思います。

山口　まず思うことは、やはり先ほど言ったように地域という力でございますが、ただ、我々青少年相談員というのは、行政でいえば教育部門なんですけれども、先ほど言ったように、いばらき子ども見守りネットワークは福祉部門なので、教育と福祉という、行政の中で連携が難しい現状もあるようなんですけれども、それを乗り越えて、我々はいろいろな活動をやってきました。子どもたちのために、もちろんひきこもり、不登校、居場所づくり、子ども食堂に当たっては、ご飯を食べるだけじゃなく、自分で作るというような考えを持って、進めていきたいなと思っているところでございます。

長谷川　うちは、去年今年と、関東近県の大会のテーマが「デザイン・トゥー・

ネクスト」なんです。次の時代をどうデザインするか。生越先生の話で、どういうふうに次の時代をデザインするか、地域をどういうふうにデザインするかという課題を出していただいて、ものすごく感謝しております。それは社会教育の大きな課題だと思うし、そのときに、子どもの声をもう一度改めて聞けよというふうに言われたことが記憶に残りました。ありがとうございました。

木村　今日はありがとうございました。

先ほどデザインという話が出たんですが、社会に子どもが合せていかなきゃいけないような社会じゃなくて、自分の人生を自分でデザインしていけるような社会、それが許されるような社会になったらいいなとずっと思っています。

ネットワーク、本当に大切だなと思っていて、不登校関連のネットワークづくりをしていこうというのも考えているんですけれども、つながることで一緒に、一つの団体だけではできないことが可能になってくると思うので、こういう機会をいただけてとてもありがたいです。ありがとうございました。

根本　私が言おうと思ったことと同じだったのですが、そのデザインというのを聞いたときに、団体とか地域とかという言葉で区切ると、やっぱりそこにボーダーラインができて、こうあるべきみたいなものがちょっと姿を現してしまうと思うんです。けれども、それも疑うというか、その都度できる、その都度感じる、自分のタマネギの皮をむく感じで、思い込みの皮をその都度はがして、その在り方もマルというのをみんなでやっていけるといいな、というのが私にとってのデザインかなと思って聞いていました。

朝日　ありがとうございました。

私もいろいろ今日思うところがあって、気持ちも揺さぶられました。長谷川先生のお話からも、余り地域に行くと地雷があるという話も、体験としてもちょっとあって、連携というのは大事だなと思うんですが、正直怖いなとも思っているのが本音です。だから、その辺を自分でいろいろ考えながらやっていかなきゃいけないんだなと思っています。あとは、さっきのｅスポーツの話ですけれども、子どもたちの興味を持っているところとか、その辺の世界に大人が余り共感できなくても、１回その視点に立ってみて考えてみるというのはとても大事で、大人のこうあるべきが子どもの自由を奪ってしまっているところがあるんじゃないかと思います。その辺は緩めるようにしていかないと、年齢が行くとどんどんこうあるべきが自分も強くなってしまうので、その辺は気をつけてやっていきたいなと思いました。あり

がとうございました。
大月　ありがとうございました。

【まとめ】

大月　それでは、最後に生越先生、まとめをお願いします。
生越　感想を言わせてください。
　皆さんのお話を聞いて、こう言うと形式的だけれども、勉強になりました。いろいろ思うところもありました。
　幾つかちょっと、ごめんなさい、まとめじゃないです。引っかかったところで、先ほど長谷川先生がおっしゃって生越はちょっと違うかもと言ったけれども、僕は同じかなと思っているんです。それはどういうことかというと、もちろんそうなんだけれども、レジュメの最後の方にも書いてあります。障害児教育と一緒にしてはいけないんですが、“障害児福祉の父”といわれる糸賀一雄という人が言ったことで、「この子らに世の光を」という言葉が元々あって、これはおかしいと。「この子らに世の光を」はおかしい、「この子らを世の光に」、つまりこの社会の中でそういう人はいるんだと。つまり、ひきこもったり、それは決して悪いことではないんだよね。僕も長谷川先生が塾の講師をして儲けている頃は本当に貧乏していましたから。僕は金もうけができなかった。できなかったというか学生だったんだけれども、だけれどもそういう人たちもいて、この社会がうまく成り立っているんだと思うんです。だから、そこを駄目と切り捨てるのは僕もすごく反対で、やっぱりそういう見方を取りたいということです。
　それから、もう一つはこれはやっぱり難しいのかなと思って、僕は地域というけれども、地雷という話もあったので、そこの戦略がいるのかな。地域といっても、枠がはまっていくところがきっとすごくあって、だけれども例えばここに集まった人たちのネットワークはそこを避けられるようなものじゃないかなと思うんですよね。

　ある市で、その人は１人で頑張っているんだけれども、農家をやりながら自分の金を出して、学校に何千枚も講演会か何かチラシを配って１人も来ないとか、それでも配るんです、何年も、自分のお金を使って。僕が行ったりすると、白菜とかくれるんですけれども、そういう人はいると思うんですよね。だから、そういう見えないところとどういうふうにネットワークを組んでやっていけるのか、どうしていいのか僕は分からなくて、むしろ皆さんのほうがノウハウはすごくあるんだと思うんですね。だから、ネットワークのネットワークみたいな、何かその辺のつくり方、間違えるとすごくうまくいかない。だけれども、人材とかあると思うんです、いると思

うんです。どうすべきなのかは分からないのだけれども、そういうことがうまく行き始めると、茨城県に素晴らしい地域、地域と言わないほうがいいのか分からないのですけれども、地域ができるのではないかなという気がしています。

僕は、地域を諦めちゃうと可能性がないと思うんですよ。だから、ぜひ、偉そうなんだけれども、頑張っていただけると助かるというのが二つ目。

もう１点だけ、さっきのピアの話なんだけれども、僕ら基本的な態度はピアとか、斜めは自然と斜めになっちゃうんだと思うんです。ピア的な、一緒に考えようよ、という姿勢がすごく大事だと思います。

僕など甘く見られていますから、子どもたちに。ピアどころか、ピカチュウとか言われ、あとお茶の水博士とか、昔から逆に下に見られていたけれども、でもそんな中でうまくいっているような、僕が勝手に思っているだけかもしれないけど、斜めが成り立つというか、年が上なので、そんなふうなことが地域の中にできていくと変わっていくはずじゃないかなと思ったりしています。

まとめじゃないですけれども、時間がないのと思うので、この辺で終わりにさせていただきます。

【閉会】

大月　今回のテーマとして、「地域に何ができるのか、今私たちができることは何か」ということで、地域で何ができるか、私たちが何ができるかまでは十分には行かなかったと思います。けれども、それぞれこちらの今日発表していただいた３つの団体、それからこちらの会長さんの４つの団体、まずはそれぞれの団体がそれぞれの会の趣旨にあった活動を地域の中で充実させていくことがまず第一じゃないかなと強く感じました。それが充実して、地域のつながりというのが今以上にというか、昔のようにというのか、より多くの理解者としてまとまっていけば、青少年の育成というのに結びついていくんじゃないか。日々の活動を更に、頑張っていくことが続けられることかな、というように思いました。

今日からまた皆さん一人ひとりが確認し合って、今日の座談会を閉じたいと思います。私も頑張ります。

今日はありがとうございました。

橋本　皆様長時間にわたりまして大変ありがとうございました。

本日の座談会につきましては、冒頭でお話させていただいたとおり、報告書という形で関係機関、市町村等に配付というようなことも考えております。

開会時に説明しました「いばらきアマビエちゃん」が資料の後ろにありますので、登録がお済みでない方は登録をお願いしたいと思います。

本日は誠にありがとうございました。

【参考資料】

令和２年度「あいさつ・声かけ運動」「大人のマナーアップ運動 －大人が変われば、子どもも変わる－」強調月間（11 月）における市町村・青少年育成市町村民会議の取り組み調査結果

令和２年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止により、多くの事業、活動が中止を余儀なくされた。

「地域を編む孤立０(ゼロ)プロジェクト」緊急座談会についても、５月に中止となった「青少年育成市町村民会議会長・事務局長・青少年行政担当者等研修会」及び８月に開催予定だった「地域を編む孤立０(ゼロ)プロジェクト」合同研修会のリスタート事業として実施したものである。

県青少年育成協会では、11 月の「あいさつ・声かけ運動」「大人のマナーアップ運動 －大人が変われば、子どもも変わる－」強調月間における市町村・市町村民会議の取り組み調査をお願いした際、活動状況についても同時に調査を行ったので、その結果を本記録集に掲載することとした。

＜調査概要＞

調査対象　　県内 44 市町村及び２市民会議

調査方法　　メール等により調査票を配布し、令和２年 12 月 25 日を提出締め切り日として依頼。（最終締切日を１月８日とした）

回 答 率　　84.8%（39 市町村・市町村民会議が回答）

令和2年度「あいさつ・声かけ運動」「大人のマナーアップ運動－大人が変われば、子どもも変わる－」強調月間の取り組み報告書

1. 11月の強調月間の貴市町村における取り組み状況について、次のいずれかに〇印をつけてください。

① 例年通り取り組んだ。	9
② 例年より規模を縮小して取り組んだ。	22
③ 取り組まなかった。（すべて中止した。）	9

2. 貴市町村及び貴市町村民会議において、取り組んだ運動の全てに〇をつけてください。

①「あいさつ・声かけ運動」	19
②「大人のマナーアップ運動－大人が変われば、子どもも変わる－」	1
③ どちらも取り組まなかった。（今年度はすべて中止した。）	11
④ その他の運動	1
⑤「あいさつ・声かけ運動」と「大人のマナーアップ運動」	8

3.「1. ①または②」に〇をつけた方に、取り組み内容についてお伺いします。

(1)該当する取り組み内容の番号、該当する取り組みに〇を付けてください。

	駅等での街頭キャンペーン	学校の校門前でのあいさつ運動を実施	通学路であいさつ運動を実施	啓発ポスター・チラシ等の配布	広報誌への掲載	のぼり旗、横断幕、看板等の設置	あいさつ標語・作文等の募集・表彰	シンポジウム、懇談会等の開催
① 通常実施	1	14	9	7	7	18	2	0
② 縮小実施	5	11	8	7	2	3	2	1
③ 計画無しまたは中止	34	15	23	26	31	19	36	39
① 通常実施	2.5%	35.0%	22.5%	17.5%	17.5%	45.0%	5.0%	0.0%
② 縮小実施	12.5%	27.5%	20.0%	17.5%	5.0%	7.5%	5.0%	2.5%
③ 計画無しまたは中止	85.0%	37.5%	57.5%	65.0%	77.5%	47.5%	90.0%	97.5%

4. 今年度の市町村及び市町村民会議の活動状況を教えてください。

	理事会・役員会	総会	子ども・若者対象事業（キャンプ、親子レク等）	作品募集事業（標語、絵画、作文等）	募集作品の発表大会・表彰式	立志式・2分の1成人式	清掃活動・環境美化活動	育成者等の研修・勉強会	啓発活動・キャンペーン	広報誌・機関紙の発行
① 通常実施	11	2	1	14	2	2	6	1	4	17
② 縮小実施（対面）	13	6	6	9	10	4	6	8	13	9
③ リモート・オンライン・書面決議	8	23	0	0	3	0	0	1	0	0
④ 計画無しまたは中止	8	9	31	16	24	32	27	29	21	14
① 通常実施	27.5%	5.0%	2.6%	35.9%	5.1%	5.3%	15.4%	2.6%	10.5%	42.5%
② 縮小実施（対面）	32.5%	15.0%	15.8%	23.1%	25.6%	10.5%	15.4%	20.5%	34.2%	22.5%
③ リモート・オンライン・書面決議	20.0%	57.5%	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	2.6%	0.0%	0.0%
④ 計画無しまたは中止	20.0%	22.5%	81.6%	41.0%	61.5%	84.2%	69.2%	74.4%	55.3%	35.0%

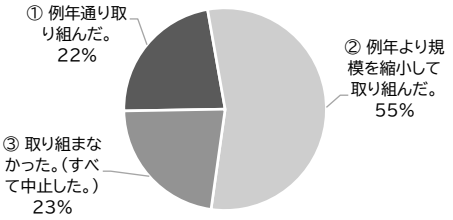
5. 当協会へのご意見等がありましたら、ご記入ください。

水戸市	・あいさつ名人キャンペーンを実施。よくできている児童を表彰。（双葉台小） ・茨城ロボッツとのあいさつ運動（下大野小） ・児童会主催「あいさつグッジョブ大作戦」（見川小） ・ホームページに掲載（大場小） ・元気なあいさつができた児童の名前を掲示（赤塚小） ・ブログで様子を紹介した（飯富小） ・二中学区小中学校交流「あいさつ運動」の実施（水戸二中）
土浦市	土浦市は、平成19年度から市民会議の青少年育成部の研修や文書の受付窓口は、市青少年相談員連絡協議会が担当しています。よって、市民会議全体の動きは把握しきれていません、そこで、担当者に聞きながら作成しました。
古河市	古河市の小中学校は積極的にあいさつ運動等を行っております。 つきましては、別紙のとおり集計しておりますので、ご確認願います。
北茨城市	理事会・役員会は、4月は中止、11月は通常開催
潮来市	「家庭の日」絵画・ポスター（表彰含む） 通常実施 少年の主張作文　募集及び発表会　　中止
常陸大宮市	市として、善行青少年・青少年健全育成者等の表彰式を行った。 毎年開催している「青少年をたたえる市民のつどい」は中止。 各支部は感染拡大に気を付けながらできる活動を続けています。
那珂市	あいさつ運動のポスター配布の時期を11月に合わせていただけると、より運動が広まるかと思います。
鉾田市・鉾田市民会議	募集作品の発表大会・表彰式は、各学校へ賞状等の交付を依頼した。
茨城町	茨城町内　小中学校6校のうち 〇学校の校門前であいさつ運動を実施 　通常実施　5校 　縮小実施　1校 〇通学路であいさつ運動を実施 　通常実施　2校 　縮小実施　2校 　中止　　2校

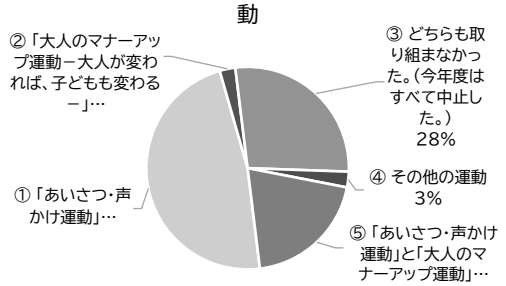
令和2年度「あいさつ・声かけ運動」「大人のマナーアップ運動 -大人が変われば、子どもも変わる-」
強調月間 取り組み調査結果

調査対象　市町村44＋市民会議2
回 答 率　39／46　84.8%
調査方法　メール等により調査票を配布し、12月25日を提出締め切り日として依頼。
1月4日に未回答者へ1月8日最終締め切りとして再度依頼した。

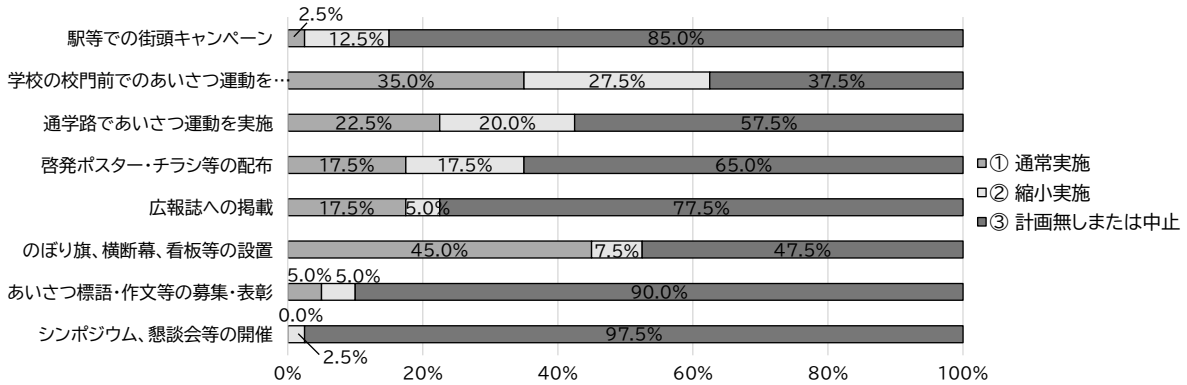
1. 11月の強調月間の市町村における取り組み状況



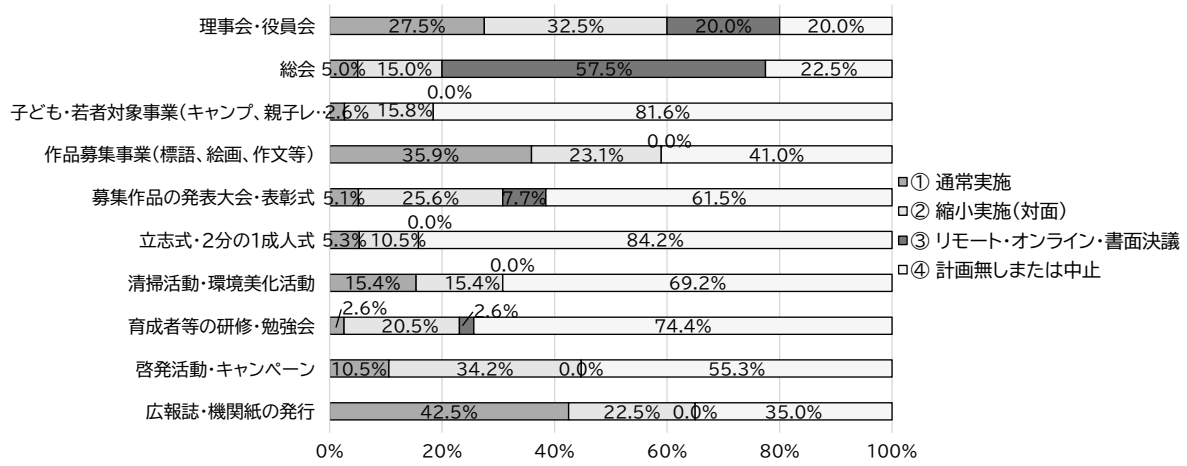
2. 市町村・市町村民会議において取り組んだ運動



3. 活動の取り組み状況



4. 青少年育成市町村民会議等における活動の取り組み状況



令和２年度「地域を編む孤立０（ゼロ）プロジェクト」記録集

令和３年３月発行

編集・発行　公益社団法人茨城県青少年育成協会

協賛　ライオンズクラブ国際協会３３３－Ｅ地区
日本たばこ産業株式会社東関東支社